

和歌山県立近代美術館

年 報

昭 和 50 年 度

昭和50年度

# 和歌山県立近代美術館年報

## 目次

田中恭吉書簡資料	1
1 主要行事	16
2 主催展覧会	
昭和50年度前期常設展	17
第2回移動美術館—和歌山の作家を中心として	18
木下孝則回顧展	19
昭和50年度後期常設展	11
1910年代における京都日本画の新動向	22
3 共催展覧会	24
4 貸館展覧会	25
5 普及活動	27
6 昭和50年度所蔵作品	29
7 所蔵品貸出状況	30
8 美術館協議会委員名簿	30
9 職員構成	30

# 田中恭吉書簡資料

昭和51年度後期の特別企画展として、「田中恭吉展」が予定されている。田中恭吉に関する資料の多くは、恭吉の、旧友、恩地孝四郎氏のご遺族の管理下にあるが、特に恭吉が恩地に宛ててしたための書簡の相当数が現在同家に保管されており、それらは、彼の芸術を理解する上で、貴重な資料といえる。今回は、恩地家のご厚意により、以下に、恭吉の書簡資料を公にすることができた。（和歌山県立近代美術館学芸員 太田将勝）

（大正2年）

男女間の根強い愛は強い性の力で完成？されるのでな  
かろうか、  
かくて私の男としての性のうすさ、  
心はくらくふさがる、  
私にみえる——女と離れてただひとりあゆむ私の後姿  
を、  
「小鳥」の生きてみたとき、①  
わたしに性慾のことについてたづねた、  
——「壓迫が怖い——私はそう言った、  
——すべてのものに根づく行けないのはつまりそれ  
がもとなのぢやないだらうか——そうも言った、小鳥  
は気の毒さうな顔をした、そして自分は壓迫がひどい  
というやうなことをほのめかした、私は寂しかった、  
そして私はEに恋した、私としてはかなり根づくよ  
く恋した、  
しかも別れの日が来たとき、私は心のかたすみで「私  
を去ってそなたは幸福だ」と思った。それは何だっ  
たらう、ああ、男としての性の力のうすさ、  
その後、女を恋することはあっても心はつねに曇っ  
てゐた、  
「傾倒する」ころもちは得られない、  
考へたつてつまらないことだ、そうも思ふ、どうにか  
しなければならぬ——そしてどうにかなるだらう。  
孝様 ②

私の女なくして生きてゐるいまのころは かなり  
さびしい。

十二月十二日朝 恭吉

○「鳥へゆくこと」もいまのところはっきりしません  
非常に淫らな鳥ときいただけで少しぢろぎました  
○「小田原」ってうれしく思ふ海辺の生活がまざまざ  
どうかぶ、③  
それにしてもまだ當分だめでせう、からだがか  
げない、  
あなたと旅に出たく思ふ、あなたが「一人」だらうと

「二人」だらうと私にとって何でもない、(そののち  
はよい方へ向つてゐますか、折折案じてゐます)  
○前にながながとかいたことももうそんなに悲しくも  
おもへない。

「かくあるゆえにかくあるのみ」そう思つてあるき  
ます、

○木版画試作3枚入れました、一、椎の樹立二、月夜  
GETSUYA 三、「赤き死の仮面」といふ製作順です、ま  
だ駄目だと思ふけれどそのうちに何かしかりした  
ものが出来るだらうと思ひます、

○花弟はユニテリアン教会のクリスマスのバックをあ  
なたに手傳つてもらふらうだといつてゐました、どう  
ぞよろしくねがつてをきます、

十三日夕 恭吉

○やすみになったらお出を乞ふ  
まつてゐます、

そして私の力はいつか衰へてしまつてゐた、それは悲  
しいことだつたけれど仕方のないことだつた、憔悴  
いまわたしに性慾の壓迫がこない、かなり長い間のこ  
と、

そして年は二十二だ、涙ぐまずにゐられない、  
私はこの平安をおもふとき實にかなしい、

私は生れてたつた一度餘所の夫人から肉を強いられた  
それが私にとって女の肌にくれたたつた一度であつた  
私はそのときかぎりない恥辱に狂気しながらも、  
その女の性慾の強さをうらやまづにはゐられなかつた  
それつきり女にはふれない、

解れるだけの力がわき出ない、

「死の勝利」のジオルジオが私に深く肝銘されてゐる  
男であつて男であるべき力のない男、  
然らば人間としても力のない人間、

× × ×

孝様

たびたびのおたよりをよろこんでゐます、「みちかい  
たよりでも」とのことだけれど

おたよりをかかうとするたびに、つまらないことをか  
きそうなのでひかえてゐました、

うつむいて耕してゐる心——をつづけてゐます、この間  
花弟さんがみえたけれどその日は馬鹿に道化しまつ  
て、おちついて話せなかつた、

この間中「性慾」についてかんがへてゐます、かんが  
へやうと思つてではないけれどつい頭に上つてくるこ  
となんです、

「性慾」をおもふたびにわたしの心は暗くふさがりま  
す淫蕩なわたしの國では、私の十四のころ、人間はかく  
抱擁するものとみせつけられた、  
それは、その年配の私として、おだやかに済まされぬ  
ことだつた、

私は私自身で出来るだけのことをした、

そしてそれが習慣となつてしまつた、

× × ×

東京へかへつたの、

おうちのことがいそがしいのに

パパさんがお退きになつたのだつてね

しづをがさうかいてきたつて

そんなことについてぢやない？

まあそれはそれとして

仕事を創めるのだから、ずいぶん疲れることだらう

せいぜいからだに氣をつけて、ね

わたしのからだも何だかわかりやしない

医者もだまつてゐるからこちらもだまつてゐる

養生だけは怠らない

一日でも生きたいんだから

快くなることをおもへばいろんな計畫をたててもみる

——あんな画をかいて、こんな詩集を出して——死、

怖れてやしない。でもなるべく遅く来て呉れるといい

この地のあちらではいくさが初まつてゐるんだつてね

小供みたいいろいろなことをかんがへて、よろこんで  
ゐる

ドイツが勝てばいいなぞとおもふ

一日に何萬といふいのちが亡くなるんだその一つを借  
して呉れるといいなとおもふ

わたしのうちはみんな病人だ

父は腰をやむ母は何か骨まく炎だつて

わたしがよくなると「悲惨なる滑稽」をかけるとおもふ  
みんなみんなおしこらへてゐる

わたしは月映の公刊の一輯に原稿をかきかけてみたが  
存外つかれるので癡した、

で、五月の血と死のうたが手許にあるならそれを出  
して下さい、

六月のうたはまとめて、「二輯」の方へ出して下さい

——これはしづをが来たときもつて行つてもらいます  
一寸かきがあるのでも小包でなければ出せないとおもふ  
めんどうだからしづををまつのです、木版もその時一  
緒にもつてゐてもらふ。

七月のうたが大分できてゐる、これもそのついでにす  
る

版画繪の「焦心」や「太陽と花」結構ですいでて下さ  
い池袋にあります

猫おばさんに言つたらわかる押入の下の行李の上にあ  
る

額ぶちや板つべらと一緒に搦んであります、あのま  
もつて行つて調べて下さい、東京で彫つたのはみなあ  
るつもりです、あの額ぶちはみんなしづをにやつて下  
さい。いつかの「かきおき」に言ひ忘れた様におもふ

「焦心」や「太陽と花」などは板つべらへ彫つたので  
摺りやさんを困らせるだらうとおもふ

その手ちがいはあらかじめ感ぜられる。うまくゆけは  
しあはせとおもふ。

「太陽と花」は油の繪具をつかつていたので具合がわ  
るいかもしれない。

とにかくいろいろお世話になつてすまなくおもふ  
今一寸こちらから手許のをおくりかねるから池袋の  
間にあはせて下さい

十二月 床上にて

東京からの二信いまいいただきました、  
どうぞその通りにして下さい、いそがしいにつけ身体  
をこわさぬやうに、ね

（大正3年）

ふたりよ（※7月6日付）

なつかしきかな。速くおもふ。

いま七月六日前十時、雇のばあさんがしづをの端書  
をもつてきて呉れた、

手紙がくればふたりからにきまつてゐる。どんなにう  
れしいことだらう、

（海に船が浮んでゐる女が濱辺に立つてゐる）その繪  
をみながら私はほほゑんできみたちの生活を想像した

ふたりを思ふ東の空をみたやはりこのやうにうすぐ  
もりしてゐる、

小田原もこんな風があるのかなぞと思ふ

日ながき私は終日なにかにまちくらすやうに太陽の  
ありかになめをあげる、

一体何をまつのだ、自分にたづねる

「もしかすると生きられるかも知れない」からという。  
あばらの痛みがそれをうちけしあざわらふ

ひるまはそれでもいいのだが、夜はかなり不眠でくる  
しめられる、

それからあけがたの胸ぐるしさ、もしくは血をみるこ

と、めがさめるといつも「まだ生きてみたのか」とおもふ  
きのふうすぐらい奥の部屋から思ひきって自分の部屋へかへってきた  
そのわりにつかれなかったのうれい  
ここからは緑の樹々が一面にみわたされる、  
窓は南にひらいてる、けふは海があらえてるらしい  
波の音が遠くきこえる  
やまひが重くなってもここにいやうと思ふ丁度おふたりが東京から小田原へ出たほどのよろこびを私はいま感ずる  
やっぱりいきて  
いかにこのいのちの美しくそだつかをみたい  
私のしたいことは山ほどある  
私は「かがやき走れる山」をみた  
「永遠の王女」をみた また「臨終」をけいけんした  
私がかかうとした画 うたはうとする歌をかぎりなくもつ  
そして肉体がそれをばむ  
「いのち」「脅迫」(宵ごとにかんずる)「闇のわらひ」「くちゆくもの」  
「會はざるもの」「いのちII」「うどんげのはな」「苦惱の谷」  
「現身と永遠」「われは濡れたり」「時」「夜のおもひ」「黒き芽」「回想」  
これらはどうにかしてほりたいとおもふ  
「月はえ」の一号から五までをたびたびくりかへしてはみる  
そしてさびしがる、  
私の事業はついそこにみえているのだ  
そして反対の方へひきづられてゆく  
× × ×  
紀伊二信(※7月17日付)  
孝、  
端書うれしく落手、  
この一週間の私は全くみじめだった、だって誰からもたよりはなし、またこの通りの寒さだもんだから虫のようにちちこまって衛生書と料理本とに仲よしになってる、それで、どうしたら身体がよくなって、どうしたら鶏卵がおいしくたべられるかといふことを大分知ったわけだ  
考へてみると何だって恩恵でないものはないんだね  
安心しておくれ 風邪もひかない、  
版画が一つ出来た、板べらが不意に出てきたせいで叱られるかもしれないが 大丈夫なんだよ、  
「絢はれゆく歓喜と悲愁」  
何だかうれしくって仕方がない(おちついてるよ)  
やっぱり私はめぐまれているんだ詩「寥人孤り詠たふ」  
はこの版画と同輯にのつけること、ちかかって違背あるべからず(詩は一べんよくよんでみて下さい間違っ

はないつもりだが)いま隣りの小女がうたってる、  
全くいい声で、  
火鉢がないんだってね、可愛そうに、ところで私も一切火の気なしだよ、胸によかないんだからね、  
いまは一体どこにどうしているんだ、お宿は、早くおちつくこと肝要なり、  
「さなぎはうたふ」「あをそら」は二月としていま送ったのは□月分、  
「きのふのかげ」や「豊島野(お手許にある)」は止しちやうね、  
処で小鳥の版画「習作」は單獨にのつけやうや  
私の考へはこふなんだ  
五輯の私の「あをそら」の次へ「香山小鳥のこと」もってって「II」とおいて  
その紙の裏に別紙の通り、印刷するんです、そして次に「習作」をいれる、そして静のが「III」になり君のが「IV」になるんだね  
おかしかつたら別に考へてもらふ、以上  
今夜はすこしはしゃいでるのなりしかし言うことは  
× × ×  
さひわひなる私はいま東に孝をもち西にしづををもつしづをは私に會はずに西へゆきました。大阪で私の兄にあって私の経過のよいに安心してのだと手紙して呉れました、  
私は會いたかったのですがやっぱり寂しくうなづいてしまいました、  
私はいまおだやかにゐます、血のいろもうすき熱も劇しく出ません、ねがはくは一時の平康でなくあかすみへの導きであらむことを、と思つてゐます、  
けふ久しぶりにちらかった部屋をみづからかたづけたときこの版画が出て来ました、  
「病鳥」。五月にほって試しずりにしたのでした  
たはらないながらこころもちだけは出てゐます、  
これをお送りするとともにしづをへは「こもれるもの」を送りましたこれも一枚きりありません、  
片眼のきんぎょと若いふなをみるあなたのひとみをこのゆふぞらのもとにおもふ  
私はいま「ねがひのうた」(ふづきのうた)を歌つてゐます  
そのうちのひとつふたつ  
やわらかにあまきなみだもうかみくれみどりをこえてひびくなみのね  
やめる身にとほいかづちも沁む夜かなまくらにしらむいちりんのはな  
雨けふるみどりをみつつつらうつらねむらむとする

こころさみしも  
ほればれとみいるあをそらいつのまになみだのうみとなりはてにけむ  
このかげにひらく芽のありそのひなたに調むはなあり  
太陽のうはしき(※7月22日付)  
× × ×  
二階の日當りで筆を採つてゐます、  
いま午飯を済して下から上つてきた処です、お手紙しみじみうれしく載しました  
つねづね筆に遠のいて取りつぱなしばかりしているので、今日は久し振り何かと記しつけようと思つて、  
ほんとうに気持よく晴れてゐます、雲一つないからとした空のしたに擴がる緑も大分秋めいて風に揺れてゐます、朱らむだ柿の實、衰えた萩のはな、木せい香、雀のこゑ、ちつと日にひたつてゐるとしん底まで温かみが沁み込むようです  
思地にたのんで月映を送らせました、  
何の雑誌でもですが初号は兎角手落ちの多いもので、次々とよくなってゆくだらうと思ひます、何しろ私はこんなあんばいだし藤森は國にかへつてゐたし思地一人で編輯や校正をやつて仕上げたのです、計畫はこの四月にたててゐたので三人とも大変な意気込だったのだが好事魔の例にもれず私が手つだはれないことになつてしまった、賣れの少ないことは三人がまづ承知でゐるのです、つまりあくまでも群集に支配されないで微力でも自分の信ずる路をやり終せるつもりでゐるのです、所がかう言つた象徴的方面での木版画集(自画自刻)はいまのところ日本(といふと大ゲサだが實際)に初めてだし値段も比較的廉だといふので東京では一部の人から好意で迎へられてゐるやうです。  
特殊な事情のないかぎりどこまで三人だけでやる筈になってゐます、  
私の画は大低池袋で自刻したものです、一輯におさめたのはこの二枚とも昨年の暮の作だと記憶してゐます  
発行部数が僅々二百部で(表紙の下方にあるNo.はそのしるしです)毎月お送りしたいのですが六ヶシからうと思ひます、洛陽堂の方でも具合がよければつづけてみるといふので、いまの処どつちかと言へば頼んで出してもらつてゐるといふ格なんですから、一部でも余計賣れば結構がわけです、こいつは最初の企畫の賣れなくともいいといふこととムジュンしますが賣れなくともいいが賣ればなほいいといふ苦しい境遇なんです、  
何だか廣告めいてきたからこれで止して少し第一輯の版画の説明をさして下さい、  
「病める夕」これは冬の夕ぐれをつめたい空とその黄いろの中に震へてゐる(といふより木枯しの中の)楳

の若い苗の戦ぎ。  
この叙景の中に私のあのころの病、並に病的な心を織りこめてみたのです、  
いらいらとした耐へがたない動揺は刀の力でかなり表はれてゐます、  
私の池袋生活のうちの作品ではすきなものの一つです  
「太陽と花」夏のいららしい太陽のもとに咲いたカンナの花の群を借りて私の虐げられた肉体及内心を具表しやうとここみたものです、  
かうしたとげとげしい画面から私の鬱積した呻吟の声と、何ごとの前にも沈着と冷静の微笑を失はない運命の支配者の力とが幾分でも表はれてゐると信じます  
藤森の諸作(これは私の感じたままをいふのです、本人の意向とは或はちがふかもしれないけれど)  
「自然と人生」  
大自然の大きさの前に、われらの生活の如何に微纖であるか、大自然の冷静の前に私らは如何に匆忙であるかしかもその匆忙は限られたる軌道を出ることが出来ない、休むことも止ることも出来ぬわれらの生活、これを山嶽と夕の空と山峽を走る一つの汽車とによつて表はさうとした、  
「夜」  
夜とは不思議にして恐ろしい一世界の名だ、我らは明る晝を追ふのち必ずこの幽深な夜を迎へねばならない伏して横はる「眠」と目醒めた精霊と星の光、によつて表されしこの畫面は藤森の内心の嘗て経験した一境地であらう  
「あゆめるもの」  
□□□□□無限の空の中にただ一個歩める姿がある——それは自己に外ならない、過去も未来も闇の中にただ自己の身が放つ光りによつて歩むより外はない  
「こころのながれ」  
この簡単な線からうける感動は、また藤森の内心を一貫する情操の清きをおもはしめる、われらはまたこの繪の黒一色の中から透徹した水のいろ、銀のやうな兩岸の白砂、ぼつちりとただ一つかかった太陽の孤獨さをおもはせられる  
「人類」  
複雑な人類の生活がここに極めて單純化されて表れてゐます、青草のうえに裸でのびのびとねてゐる一人、太陽、一線一劃も無駄なく生きてゐます、  
思地孝の作品についても一つ一つかいてみたいが残念だが少しつかれました、  
「伴病めり」は私に連關した心情を孝獨特の形式で表はしたものの、どれが□□□□出来ずとも線、並色調からこの繪の力は充分に汲めず、  
抒情I及IIIは君が異性に対する感情を示したものとおもふ、瞳の力並に周囲の暗、及光の線によつて止みが

たないところの叫びを感じる、ただよへるものは「人間の生活、それを蓋放する宇宙の神秘」を表したものといたらいいでせうか

夏目小景は君が小田原にこの夏みたころの作品、小虫水、土、草等を微妙に組合はせた可憐な小戯曲といふ感じがします

月映はこれだけにして少し私の近況をかきたいと思ひます、同時に俊さんの御心配並に親切におこたへしやうとおもひます、

肉体の様子は俊さんに八月末お目にかかった時よりは十分よくなっています。この頃は床もとらず毎日裏庭をぶらついてゐます、熱はあのころとあまり変わらないのですが、寝ついてゐないことだけでも大変幸福におもつてゐます、そこで精神状態は至極おちついてゐることをお話ししなければならぬ

それについて少しけいくわをかきます、

四月にかへつたころはまるで全快したつもりでゐたところが五月中旬に突然咯血した、郭にみてもらうと癒り切つてゐないとのこと、しかし安心させるためかほんの肺炎だといふ、兎に角寝ついて少し楽になってから聯隊附の軍医にみてもらった、これは餘程腕利い人で肺専門といつてもいい人、すると立派な肺結核だしかも二期も余程遅れてゐるいまの所手のつけやうがないと言ひ切つた、これには私も驚かされた、尤もこの頃すでに私の内心は昨年来かなりな訓練をへてゐて、人生観もかなり進んでゐました、しかしこの明快な医者としてめづらしい断言をきいたときやっぱり駄目だったのだといふ気が實際した、それが六月、仕方がないから寝てゐた、薬も一いろでは済まないでいろいろと飲んでみた、うまいものも食つてゐた。しかし衰弱は日に日に増す、ちつとねつたままながい五月雨をきいてくらし、

この頃私の悩みは極点に達してゐたのでしたしかしあれだけの短歌を作るだけの餘裕はあった、私は敢て餘裕といふ私の歌を作りうる時はすでに自分を客観し得た時でしたから、立派な作品をうる場合は二種あると思ひます眞實自己に没頭し得たとき(大主観)と眞實自己を客観し得たとき。

私のあのみなつきのうたを得たといふのもたしかにもう心に餘裕のあつたしるしとおもひます、去年の十月不意に咯血のあつたころのことを思ふと私はまるでちがった人間になつた様な気がします、あの時は俊さんから論されたやうに、まったく女々しかったのでした、そしてあの當座はまるで作品なんぞ出来はしませんでした、それに比べるとそれに比べるとこの六月は昨年よりもっとひどい痛苦であつたにもかかはらずどこかおちついてゐたのですそれからのち私の精神はますます良好に向ひました、

私は私を支配する大きな力をまぎまぎとしたとき、私は昨日の私ではありませんでした。

「一切の愚痴を廢せよ而して今日にこころせよ」  
「神はその最愛の子を幾度か試練したまふ」「人はみづからの意志の薄弱による外決して悪魔に又死に、その身をゆだねることなし」それらの旨は私の頭にやきつけられた、私は毎日歌をつくつた、そして喜んだ、俊さん、どうか喜んで下さい、私はもう大丈夫です、私はもう決して昨年をやうではありません、歌のあらはれる語に「悲」「哀」「死」「滅」などの字がみえても決して心配して下さるな、私は喜びながら歌作してこそ居れ決して故なくげきはしませんが、

また故なく喜びもしませんが、私はもう質實に今日を耕してゆくほか何もしたくない、妄想も稚ない追憶もすべて私から去りました、しかしまだこのままでは済みません私はまだまだ苦しめられるでせう

そして苦しめられる度に強くなるでせう、私のいのちのあらむかぎりもう泣きごとは言はないでしょう、戦つてみせます、あくまで戦つてみせます、死を臆することなくまた死を忘れてもならない、明日の死あるゆえに今日の生は尊い、死をおもふ所以はまた生をおもふに外ならない私はただ死を恐れて命をちぢめる愚を決してしません、ただ「死」から訓練されることを辞さない、

忘れもしない八月十日の午前私は三度目の大咯血をしました、身体はへとへとになつてまいりました、しかもそのころ私はもう立派になつてゐました、私は人の遠いこの二階で一人でその仕末をしました、数時間たつてから家の人に話しました、私は自分でその自分をいとしく思ひました、この平静をもつて沈着をもつてすべてのことをして行きたいとおもひました私にもやはり日本人の血が流れてゐるとおもひましたこの頃ではもう自分が病人であることすら忘れることがあります、

それほど私はその日その日を享け楽しんでゐるのです夢を見ますまい、私は癒つたらあしやうこしやうなどとは考へてゐません、私はあまりに空想家だったので、空想もいい、空想とともに何かを進めて行くなら。しかし私のは全くの空想家□□□□□□不幸なものでない、私を立派な人間にしてくれました、私はただ今日に留意して生きて行きます、癒る癒らないは時日の証明してくれる所と、たのしんで生活してゐます不言実行古い言葉だが尊く思はれます、俊さんどうか安心して下さい、私はほんとうにおちついてゐるのです、八月下旬の私の話しぶりでもわかるでせう、

悲しんでいたらきつと愚痴の一つもいふところですが、三浦様云々のことうれしく存じます、お忙しい(俊さんにしても、先様にしても)ことだから強いておねがひはしません、もう大抵の養生法はのみこんで居りますから

いろいろまだのこつてゐる気がしますがこれで止めます疲れきらないうちに、折々葉端書なぞのおたよりをまつ、

十月六日 紀伊吹上にて恭吉  
上州富岡の俊様  
× × ×

孝様、私の身は安らかにある、あなたのなやみをおもふ、みんな身のためだ、何をなげかう、私は生 初めての尊い秋をみてゐる、それにしても私の作品はまだそれを連れないうちでもいい、私はまだまだ進みうる、

たびたびのおたよりにいつも返へたいとおもふけれどついすぎてしまふ

香山君のをのせるなら板は私の行李の底にある筈、間にあふなら港屋へ私のを出して下すつてもいい、でももう昔のものは何だかやになつてしまつた、それといへば

月映の方も二輯はあれでいいとして三輯に「あをそら」と「去勢者……」のをせてあとは暫くふつり止してもらいたいやうに思ふ、こんなことを言つて二人に忙がしがらせるのはいやだが、つくづく昔のものがいや気がさしてきたんだ、二人のものと釣合はないんだからね

(ほんとうに、いま板が彫れたならいいものが出て来るとおもふが、いやいやこらへるんだ、いまにいい日を作つてみせる)どうかさうしてお呉れよだつ子でしやうがないんだ(その代り詩は勉強いたします)

みなとやさんの繁昌を遠くからいつてゐます、と申して下さい

いまに達者になつてお金をこさへて出かけます  
「流轉」をおくる、いま「しづかにふかく」をあつめてゐます

これは来月送れる筈、(三輯にも「きのふのかげ」がのらなければ「流轉」をのけること)やがて二輯が見られると思ふとたまらない、ほんとうに生甲斐があるよ  
十月七日

二階の日當りでかいてゐると遠くの小学校から「大の男のべんけい」が ってきこえてきたうれい世の中だ  
Maa ! Ittai nan té koto darō. (※11月12日付)

Watashi wa jibun no koto no yō ni kangaété ita no ni.

Soléga sukkari uragiralété cimatta.  
(YOSOKU) to ū mono wa até ni naranai.

Wataci nala Wataci nala.—to  
omottémo miru. Demo minna (SADAME)da.  
Wataci wa tada anata ga  
ikanalu baai nimo jibun o toliucinaiva  
sumai to, yasanji té imasu.  
cikaci, jiletai! jiletai!  
ichido kite kudasai

× × ×  
孝、私は、君の完美した書信に対して、また美しい心で感應し得たことを感謝する、私は君、及しづをの胸中をおもひ、また、君たち二人の間に新に結ばれたる心をおもふて悦ばずにはゐられない、私は非常に落ちついてゐる、しかも心は、君たちに向つて躍つてゐるしづをのたよりのうちに「孝もわれのために涙しくれたり彼もまた同じ運命をもちしものなり」といひ、きみがいま「しかしいまは、いまは、新たに静雄をみる」といふに、私の心は躍らざるを得ない、

君が「正しく言へば云々」といふ事は、私のひそかに豫想出来たことであつた、否否わたしはそれをちつと気に懸けてゐたのだ、私の病んで君たち二人から遠ざかつたことには自身の苦しみ以外に君たちに対する苦しみがあつた、何故といふに、そのころ私——恭吉は「孝」と「しづを」をつなぐ唯一の連鎖であつたからである、私はその時すでに「孝」を信じてゐた、と共に「しづを」信じてゐた、そして「孝」と「しづを」との間には實においてかなり異なる所あることも知つてゐた、しかし、それは時の推移と共に充分握手しうることを豫感してひそかに安心してゐた、そして私自身が君たち二人の中間にあることを喜びとし楽しみとしてみてゐたのであつた、その 不意に私は私たちから遠のくべく余儀なくせられた、

暑い日のあひだ、私は脅迫を受ける床のうえで時折それを思ひ浮べた、しかしみづからの病の治癒を信じ得る前に君たちの握手は早く信じられてゐた、ただ漠然とさうあり得ることを思つてゐたのであつた、(その日、しづをの愛妹を失ふことなど、どうして考えられやう)

我らが現身を分けて栖む上は、事に觸れてその間に溝の生じるのは是非ないことである、私はひとりそれを永く歎いてきた、そしていまは何でもないことにおもふ、我らは溝のうへに握手する、そして欣びとかなしみを流し交はす、その愛の深まるほど溝は忘れられてしまふいま、しづをを思ひ、君をおもひ、又その二人の間をおもふ時、私は自身の豫感と信に感謝しそして君たちふたりに新たに増されたる幸ひを思つてたまらなくなる、ああ、日が来た、日が来た、そふ思ふ。私たちはこの赤裸の身肌を、やつよくつよくびつたりとおしつけあふてお互に愛しあはふ、

しづをは今ま身につけてゐたものを失つた、きみもまた、さきの日そうであった、しかし、我らが何物かを失ふたときは既に新に、より以上のものを得た時であることを信じたい、そう信じねば生きられないからである、しづをが新たな愛妹と生き、君が二人の兄上と一人の愛妹とを形なくして身につけ、私が生母一人の兄、及一人の友（小鳥である、私はここにそのことを少しひたい、彼の生きてありし日彼と私との間にはかなりのへだたりがあった、しかも一点で結ばれてゐた、私はその結ばれた一点のみみつめた、その時彼は死んだ、彼の霊はいま私と共に栖む、彼は彼の死とともにいやふかく私に接近した、彼の霊は私と共に毎日に生成することを感ずる）の霊と共に生きることを信じ得られるのはよきなき恩恵である、

いろいろのことが、この現身をいよいよ儚く感じしめると共に、この現身の大切さをしみじみと感じ強める、自分はいま生きてゐる、しかも何物とも換へがたいよき友と共にこの現身をもつといふことはくどいやうだが最大の喜びである、孝、わたしは死なない、君の信じて呉れるがごとく私自身に確信がある、

それと一緒にまた我等の浅い力で感ずる事の出来ない不慮事を思ふ、そして、そこに何らの悔もたぬ用意がありたい、私は「恭吉死す」といふこの簡単な言葉をよく思つてみる、それは小事であり又大事である病、まことにきみのいふ如くそは生きる側の一現象にすぎない、ただそれがともすれば死に結びつきやすいといふ意味で怖がられるだけだ、もし無病者は絶対に死なないといふ事があつたら私の怖れはもっと深いであらう、その現身を殺さずして止む病は最も厚い慈恵である、ことを思ふ、私は一方快癒を信ずるねがひを絶たぬと共に、一方一瞬後に来る死に対しても用意している、そこに明かに天の意力を感ずる畢竟するに不慮事に対してのそなへである、（私が家人にあてた遺言状はいまも書棚の中に微笑している）私は何事に処しても「わがのぞみ」と「死」とを並べて考へさせられる、それから、私の周囲の事件はまだはっきりきまらない、しかし私の頭をいためることはちつともない、私にはもう何事も明快に処理出来るほどの力が出来たといふ解決したらしらせるが、いや知らせるほどの事でもないが、兎に角気にしないやうに、ね、

君たち二人のことについても私はわけなく心配しない、みんなもう大人になったんだものね、私はまた當分ちつと自身のことだけ考へさせて貰はう——それはこの病を駆逐することだ、私は一番にこれを具体的になし終せねばならない、身体さへよくなれば、偉くなれると思つて當分他のことはなまける、版もまあ當分すっかり廢める、歌だけはうたはずにゐられないが、孝、私とてもお互に遠隔の地にあるさびしさをおも

ふ、しかしまた思ふ、離間は私たちの愛を更に強めることを。つらつら思ふ、私にはやはり運命のめぐみがふかい、時として「偶然」をおもひ「唯物」に走らせやうとする気分もわからないで無いが終に終にすべてはなつかしいところの故郷にかへってくる、のぶ子様としづををよろしく、

十二月十二日午後三時 恭  
追補、月映の一輯は是非、静雄の愛妹のために捧ぐべきものだとおもふ、そのゆかりに孝もその愛妹についての作品をあつめるのがいいとおもふ、そして私も亡友小鳥をそこに一緒に弔はさしてもらつたらなどとかんがへてみる、（こんなことは二人にまかせ）いづれにしても急ぐのはよくないから静雄の都合で第四輯でも第五輯でもいいと思ふ 以上、私の封筒や紙がいつもいやなので困っている、でもこんなことにせたくを言ふ境遇でないので、しんぼうする、

この手紙と行きちがいに月映第三がきさうにおもふ、  
(大正4年)

孝、(1月3日付)  
お手紙くりかへしよみ深く君と自分との間を思ふ、私は風邪も引かずに快く十四年を送り十五年を迎えた—これは單に私一人の喜びのみでなくこの年初の君への第一のたよりとして最も君を安めるものであることを思ふ、孝、私は病氣だ、しかしひとつのその病氣以外ちつとも悪かない、その病氣すら日一日少しづつ撃退してゐることを感じてゐる、

ありがたうよ、私はほんとうに君の信ずる如く慢心しない、うれしくても躍りあがらない、ちつとこらへるわたしはこの年をいい年だと思つてゐる、「病のこりなく去る」と記しつけるべき年だと思つてゐる、そのために努力する、なべてをおしこらへる、そのために他のことをなまけることを許してもらいたい、孝、私は私の生涯の傑作の一つとして文字なき詩「われは我力もてわがうちにひそめる悪をしりぞけたり」を造らなくてはならないんだ、ほんのしばらく私は他の仕事について怠る必要がある、

私の誕生日は四月九日だ（そして君のそれは七月一日だ）私はいままで生誕の日をゆるがせにしてゐるがこれからはこの日を区劃としてはっきりした生長を測らうと思ふ、今年のその日までには私はよりよき健康と幸福とにひたりたいとねがひ努めてゐるまことに君のいふが如く死は絶対の消滅でないにしても幽明境を異にすることはわれらにとってよきなき恨事である、萬有流轉のその一瞬時にわれらかく現身をもって相契りあふことのこの尊とさを、この慈恵を、どうしておろそかにしてよいものぞ、  
ふかくふかく君が愛をおもひ、みづからの力を養ひ

づからをいつくしまふ、孝よ、恭吉もしっかりしてきた、かりそめのよろこびにこの肉体を損ずる愚はくりかへすまい、我ために重ねられた君の切なる言葉に対し、私はまた「乞ふ安んぜよ、この身はわが有にしてまた君が有なることを思ひ養ふ」と重ねていひたい、ついでにいふ、私にはいままでつまらない我慢があつたがそれもこのごろ無くなった、寒い日などはちつとひとみ、何くれとなく身をいたはつてゐる。

「肉体とは精神ならざるか、もし肉体にして精神ならずとせば精神とは何ものぞや」それはホイットマンの言葉のみでない、ああ肉体よ尊きかな、  
「親信するものに於て収獲は一つになる」  
ほんとうによく言つて呉れた、私は私に待つごとく君にまつ、われらはいよいよ深くなる、そしてよくなるなやみもよろこびもつひにわれらにとつて一つだ、君なきわれを自分も考えることが出来ない。私はだんだん快くなる、君はまた力強くなつて呉れよ、そして作品がその根をもつ生活をふかめよ、われら若し、孝よ、その一つのうちでも、愛と力の漲れる腕もて汝のよき妻びとを抱けよ、残れる一つもて私は又君のその心核にまで抱かれやふ、私たちはどこまで育つものかしらぬ、けれども相合ふて生れ會つたことに於てわれらは何者よりもさひはひだ、いとしめよ、われもみづからいつくしむ、静かなる新春の二日もすぎた、正月だけに宅に出入する人が多くてうさかつたけれどまづ私はひっそりとしたうれしい日をおくつた、そして形のうでであつたひとりゐるうれしさをしみじみ味つた、私は次第に雑音からのがれさうとしてゐる、まづこのよろこびを、

一月三日夜の時（紀伊第一信） 恭吉  
静が港屋の封筒を呉れたので當分すっきりした手紙をおくれる、また四輯でせわしいんだね、のぶ子さんによろしく、それからついでに港屋さんにも  
× × ×

紀伊特信 第二、(※2月2日付)  
孝と静、ありがたうよありがたうよ、  
いま「死によりてあげらるる生」を手にし得た、二月二日前九時  
をどりあがる心をちつとしづめて、わきあがる叫びをおしなだめて、  
くりかへしくりかへし見入る、  
「おおこれわがも手の手によりて成りたるものなり」  
うれしきかな、うれしきかな（わが生いよいよ高めらる）  
第一表紙のしつとりとものなつかしいこと、「死によりて……」の字のうれしきこと、  
序歌のたまらない高貴さ、更に更に二人の詩と画のつつましき、しみじみしき、あかずあかずくりかへし見

入る、  
待ち侘びたところに、げに待ち侘びただけの甲斐あるものが与へられた。  
二人に新らなる感謝のころをおくり、あらためて亡き芳子様の霊にふかきいのりをささげる。  
ああわれらつひにさひはひなり  
ほんとうによいものを造つてくれた 重ねて礼をいふ  
そしてそのしるしに「よるの芽」をおくる、

以上、二月二日 恭吉  
○先便 紀伊特信の終りの方に「遊墮と朦朧」といふ字がある「墮」の字は惰の誤りだつたのに気付く、直しておいてほしい、  
孝の詩をよんで気づいたのだつた、私はときどき誤字をかくので済まなく思つてゐる。  
○ついでに、今度の輯の「附記」のうちで左の通り正してもらいたいのがあつた、尤もこれは原文の間違ひだつたらうが讀者に済まないゆゑ。

「附記」3頁上段3行 さみしいでは  
同頁下段15行 墓石を立てよ  
○便宜のため第三輯の正誤を改めてかく  
3頁9行 かのうぐちの日に  
同19行 はまのべにきて……月光あをくして  
8頁2行 しづかなるかな

も一つついでに、十三年ばかり前渡米したまま、たよりのなかつた兄の一人からゆくりなくいふ私にたよりのあつた、私は、私を愛してくれる彼の手紙を久しぶりでみてなみだをこぼした。いろいろと私によい事が降りかかってくる。友よ、悠久の友よよろこんで呉れよ、私は勇氣と希望の光りで見たまされてゐるそして養つてゐる、  
「新聞のキリヌキはこの次の時おくる」  
× × ×

孝  
原稿を出さうと思つてゐる処へお葉書がついたのでうれしかった。そうしてまた君が「外の仕事」の出来たことについても君だから私は安心してゐる、兎に角私はこの前のきみの葉書をうけとつたとき、自分と、  
『二人の勇躍は自然また私の病を軽快ならしめる、私は遠くから君たちについて喜びそうして安心してゐるわが敬愛する兄妹よ  
私の信ずるが如く、郷等はつねにその最善の方法を採ることを忘れないであらう。よき日をつくらむがために努力を怠るなかれ私はまた郷等の新居に私の病の快癒を傳へむために骨折る』  
とかきつけてゐる。

「ゆめの日のかけ」早速送られて有難かつた。  
処で改めて整理したが、やっぱり十二頁になつちまつた。遠慮はいらぬといつてもあんまりのさびりすぎる。

でもまあほんとうに古いものは片づけたい。  
配列は「ゆめの日のかけ」を先にして「北豊島野」はあとに置くこと

「小鳥のこと」はそれでは繪の方につけることにしようね

先のがいやになったのでいま改めてかき直した。

これで「彼の歌はかなりあるが……」以下が邪魔になるなら切って取り、餘録の方へ「小鳥の歌について」として分けてもらってもいい。しかし一緒に画の方へつけてもらったら収まりはいいが、どっちでもいいやうにお委せする、

マークは恐縮、猶充分孝、静によって洗練せられたし外廓の大小は随意に願ふ（いづれ孝が彫ってくれることと思ふが）

新月もなるべく細き方気持ちよからむ、デリケートに、デリケートに。

君はその正しき戦をつづけよ

私はまたちっとの間何もせずに遊びます。

よいたよりをまちながら。

二月十七日夜 恭吉

× × ×

孝、私はこんど君の身辺に起きた事件を「喜びをいやふかく味はさせむがために与へられた支障」であると目してみた、私は君の固な態度に、遠くうれしかる私たちは結局、何事につづかってもこれを幸福化して行けるんだ、君のうちに生じる出来ごとがまた遠くある私の内部に餘波をつたへることも感謝せられる、すべての事件は私たちのうちに眠れるもの、また散撒せるものをひきまとめめぎます。われらにかかる慈光は廣大無辺だ、しかし君が無駄な努力（一対者によって余儀なくせられる一）を重ねないで、（しかし結局無駄な努力といふことはないことになるかもしれないが）早くよい方へ解決することを私はねがっている、——よい返事のくることをね、

私が以後なるべく血や痛みをみないで全快したいといふ念と一緒になんだ。

月映返信諸事諒承、  
短詠集のことは大変ありがたい、しかしつまり頁がこれだけ増すことになるんだね、そちらの都合がよければ私の方は結構だが、いいのかい、

よかったら、いつからでも初めてもらほうね、まとまるべき一巻の名を「白映集」と名づけることにしようその第1部（これはただここでの説明のための字）が「夜の芽」第二部「白映」第三「……」……として行かう。中扉云々のことは君のいふ通りにしようよ。処で組方なんだね、四六にすると五號字でせいぜい十二行二十五字ぐらいなんだらう、まづ字詰の方から言っ

「傷みて×なほも×ほほえむ××芽なれば×いとど×かわゆし」が1行に納まらなくなるね。（もっと字数の多い句もあるから）それで二行に折って、

「傷みて なほも ほほえむ  
芽なれば いとど かわゆし」とすればいいわけだが今度は頁数に関係してくる、一頁に二首しかおさまらなくなる、あの「夜の芽」は一頁五首で八頁の筈だった、いろいろ考へるのは君も面倒だから六號文字にしてしまったらどうだらう、眼さきも変ってよかないかと思ふ、すれば十五行で立派にゆけるんだものね、短詠集としても可愛いものになる。そしてそれに應じた輪廓をつくる。

そうしやうや。また君のかんがへもきかしてほしい、（五輯で當分忙しいだらうからゆっくりでいい）これから頁数もあらかじめ決めておきたい「夜の芽」は八頁だったが次からもずっとそれ位につづけて（十頁くらいはいいのかね）ゆかう、

私がわざわざ「短詠」と銘したのは何もあの「夜の芽」形式にのみ執するつもりではなかった、次の「白映」ではこの間の序詩四・五のやうな形をとってゐる。それから従来の短歌形もこの「短詠」のもとに収め込まうと思つてゐる、多くの小さな形を統率してゆかうと思ふ、無論一部一部では気分がごっちゃにならないやうに気をつける、形式は種々にわたっても形式のためにくちけたり情したりしたくないと思つてゐる、つまり「短詠」は私の他の「長詠」をして一層明かに自由に延びさせたいといふ微意である、

別に月映のいまの紙型上から刺激せられて十二行詩をかいてゐる、「情景小趣」だ。内容の體裁が第七輯から替るとのことだが行数もかはるのかい、ついでに知らせしてほしい、なあに変わったっていいんだがね、

二月二十三日 恭

短歌集のことで一寸思ひついたんだが、  
毎號小さなマーク形の欄画（といふのでないのかもしらぬが）を命題の下へ入れてたらどうかとおもふ、たとへば左のやうにね、「白映」はまたその時別のにするといふ風に。そしてその大きさは一寸五分位の正方形にきめておくと全体できちんとまとまる。  
これは気分だけ私がペンでかいて君たちに交代で彫ってもらうんだ。

責任呼ばはりをするやうなものでないんだ。「よるの芽」のそれはまづ静雄にたのむことにした。次の「白映」はおっつけ君にねがふ、

以上

今「白映」の欄画が出来たので同封する、「夜の芽」の欄画はしづの方へ送る、おついでに彫っておくれギザギザはのみのまねだ、よろしく、  
情景小趣より

墓場へゆく 野の小徑

草生はやはらかに燃え 樹立はのんびりと立つ

その枝に男がひとりあがつてうすうす笑つては

指を繰つてゐる——おかしなをとこ  
何をわらつて 何を数へてゐるの小父さん、  
しづかな日だ ちっときくと  
遠くで何か鳴つてゐる…… ……  
かすかだけれど いやに耳を刺すおと  
雪と太陽 照つたり 陰つたりする光りになにも  
かも 一度に笑つては しづむ  
でも樹の上の男は だまつてわらひながら指を繰  
つてゐる——小徑をみつめて（※2月23日付）

この次の特別輯は是非孝とのぶ子さんの新生活を記念するものでなければならぬと思ふ。そして新たな喜びのための記録を造りたいと思ふ。

これは私のみの冀望ではあるまい、私はこの手紙と同時に静にもこの事を提議する、静も無論賛同するに違ない。いまからこの事を言つて置いて君の準備をねがつて置く、そしてねがはくは「底のなやみ」の様な手摺を一枚入れて貰ひたいのだ、ずっと前から手をつけてをけばそんなに苦しくないだらうと思ふ——労働のことだ。無論のぶ子さんも手傳ふ必要がある、兎に角特別輯は君の番だ、私はそれを君の作のみでいたいと思つている。それを君がむづかつてだだをこねるなら、静と私と二人で喜びの伴奏をつとめさせてもらつてもいい。しかしなるべくは一人集でありたい。  
君の父上に献げる純眞な喜びをもつてのみみたしたい  
二十三日夕 恭吉

短詠集「白映集」の順序

「よるの芽」

「白映」

「悠流」

以下未詳

白映集について附記 第一、  
中扉には左の文字を入れる（縦でも横でもどうでもいいが）横の方がおさまりがいいと思ふ

その次は、左のごとし（命題とカットのみ）  
あの原稿の表にかいた「短詠三十二」及「田中未知」の文字はげつる、

右を第一頁とすればその裏面即第二頁は製作年月のみ五號にて刷る、以下三頁より詩句配列、  
いろいろと考へてみる、

何しろすぐ詩集になるだけに今から気持だけはよく考へておかねばならない。思想と技巧のまづしいのはいまどうとも出来ないが、気分だけはすっきりさせたいと思つてね。それで思ひ切つて各部をきちんと十頁づつにすることにしたい。そっちの都合でどうなるかし

らないがまあ希望だけ言つておく。こんな作は小説や長詩とちがつて、頁を限つておく方が結局いいんだ、随時にかきつけたものから抜いてくるんだからね。

まづ「夜の芽」を十頁にしたい。それは別に附加する必要はない、あれは三十二首あったから一頁四首づつに組んで丁度八頁、扉とともに丁度十頁、そうすると大変きちんと納まる、六號文字十五行のわりに組んで六號文字十五行のわりに組んで前で二行後で一行開けると四首が気持ちよくなる。尤も中頃に「一月十九日小雨云々」の脇付けがあつたがあれは除いてしまふ、何もなければならぬものではなかったのだから。そして初句を

「わかれみし×小鳩×帰るぬ× 身につき× まつわる×うれしき」とする。ついでに直しておいてもらふ  
× × ×（※2月23日付）

お葉書いまいたく（※3月10日付）

ほんとうに忙しいことだね つかれないやうにねがふ小包たしかに落手、昨日、ひる。

いろいろと済まなく思ふ

でもまあだまつてだまつてこの感謝を私の作品にうつしてゆく。

けふは早速一枚かきました。インクはいいの、まだかなり豊富なんだから。ありがたう。

白いかみがどっさりあるのはたまらなくうれしい。気のむくたびに何かと染めつけてゆかうと思ふ。

それがお礼のしるしだ。

赤い「つくはえ」

陽気なこころもちで手にとる。

□さんの版画は気持ちよくみた。おついでによろしくつたへてほしい。私たちの立場をはっきりさせるために又讀者のために、ほかの方の繪を随時に入れてゆきたいと思ふ。このことはまた「月映」自身を大きくする所以であろう。日本でただ一つの版画集を○○○○○○○○なるべく寛大にいろんな人のを抱きこめたい私はもういろんな人がいろんな事をやるほど私自身がはっきりするやうに思ふ。

二人の版画しみじみとみる。静の「ささげもてるもの」  
孝の「苦惱のうちにひかる」「生はさみし……」

静から「病鳥」のことをたづねてきた

二人が好意をもつてくれるならいいと返事した。

古いものはいやだけれどこれだけ伸びてきたしるしになると思へばほほえみもせられる。

よい油繪をかかれむことをねがふ。

以下月映用件

○「相信其他」の終りの方の「そのかみのゆめの……」から終りの「しづかなり」までの小篇つまり「以下六号にて組む」といふの三つは削去してください。

けふは少しそはそはしてゐるのでこれだけにする 恭

孝

お葉書、つづいてお手紙うれしく落手。  
手紙は、東京から静の出したのと一緒に仲よく届いた。昨夕のうすあかりに交々繰りかへしてよみ明るき心となる。  
しづをは小田原から兄の静へ宛てて出した端書を封じてあった。それにより兄が横濱の税関でシカられた事を知り、ついつい赤ン坊のやうに笑ってしまった。人間は人のしくじったことがなぜおかしいのだらうと思ふ。笑ってしまつて済まない気がした。  
兄の忙しいことを遠くから察してみた。雑用で忙しいのはいいけれど身の疲れなことをねがふ。  
しっくりとかの新居に落ちつく日も近い事と思ふ。私は自分を大事にしてゐる？まだまだ重忠の域から離れないことが一層私を勇ませる。私はちつと落ちついてゐるけれども馬に鞭あてて戦場を疾駆する兵士の気もちも覚える。しづかに、しづかに、(勇ましく勇ましく)ゐる。  
しづをの手紙には君の新居のこと、忙しい中にも快い労働其他について明るい気分がかいてあった。コバさんがなぜ静雄をホクハンと呼ぶかはしづを自身も知らないらしい。私にもわからない。  
私もはやくアグナをつけられて柱や縁を洗って壁を塗るやうになりたいと思ふ。  
しづをか旅行の序に私に合へると言つて呉れたのだが又私もあひたいのだし、兄だつてさう思ふだらうけれど、こん度は止さうと私はいった。  
ほんとうに私はいま大事なんだ。  
この前いつもうちに来る人が私を楽しませるために面白い話を持ってきてくれたとき私は思はず笑つてあとでひどい目にあつた。  
いまでも折々血が出ることになつちまつた。實際大抵の場合は笑はずに話をするのは不可能だし、それを気にして話をするのも不愉快だしするので、思ひ切つて會はない方がいいと思ふ。  
ほんとうになんの心配もなく手をとつてお互に話す日を造つてみせる。そのよい運命を生んでみせる。  
今に、今にと呼ぶこゑはだんだん力づいてくる。  
ここで止める。コバさんによろしく。

4月8日 恭吉

× × ×

手紙をかきたいと思つて、四、五日いつの間にか経つて了つた。この頃嫌にうすら寒い日がつづくけれども私は幸ひ順況にゐるから安心してほしい。葉書はうれしかった。白秋氏の事業のこと、私の生命により充奮を与へて呉れた。これからさきどんな美しい。珍らしい、喜ばしいことがわいてくるかしのれないと思ふと仰

々死ねない。いろんなことから月映のことに思ひ到つてその改良の点を考へなどした。結局私たちの生活そのものを深めるより仕方がないと思つた。  
体裁などは要するに一時的のものだと思ふ——大切には相違ないが。内容のことを思ふと私自身少し心細い気がする。病氣となれつこになつて潑刺としたものがわきあがらないことが。  
こんなことは一時的の現象であつてほしいと希つてゐる。月映六輯が手に入つたらまた気分が新になるやう気がする。おつつけ出ることと思ふ。  
七輯に君の詩の出ることはありがたいことだ。はるかにもちわぶる。  
私はまだ和泉へゆかない。天候がこんななのでひかへめにしてゐる。ゆけばきつといいことがあると思つてゐるけれども。  
静は旅先から3枚の繪葉書をくれた。一つは吉野から二つは奈良から。その様子でみるとかなりよい刺激を得てゐるらしい。私はいつか三人であのあたりをあるくことを思つてみた。もう、それは夢想でない。  
この間、私は紀伊で受取つたすべての書翰の整理をした。この約一年間にうけた信書は私にとって重要な高貴なものに相違なかつた。私は日附のままにとりそろへてよみかへし新たな感激にうたれた。君の封書は大変都合がよかつた。統一がついてゐるので。  
私も充分に健康が回復したのは正製した域に入りたいと希つてゐる。からだの自由がきかないと何やかや不統一になつて癪だ。一体病氣そのものが身体の不統一からきてゐるのだ。  
この間からかきためた画が六枚集まつた。せめて十枚にして一輯にしたいと思ふが無理をしてもいけないしそれに前に書いたやうに気分がおなじ処に停滞してゐるのでいいものが出来さうにもないので兎に角これだけを「心原幽趣」のIIとして白秋氏にささげることにした。この手紙と共に小包で送るからついたらいつでも都合のいい時に氏をおたづねしてほしい。静雄が帰京したのちよかつたら静雄と一緒におたづねしたらどうかと思ふ、氏は静雄とお国がおなじだからその方面の話に花が咲くかもしれない。  
私から氏に宛てた手紙はここに同封する。君にも静にもよんで貰つていいと思つて、手紙は画集の間にはさんで持つていって貰ふことにしやう。(画集はあのままもつて行ってかれてもいい。もし黒ラシャ紙があるなら簡単な被ひを造つて呉れば汚れなくてありがたいと思ふ。君に委せる)、  
私の画もはがゆい処にとまつてゐる。○○○○ぬけたらいい処へ出られると思ふが。  
しかしかなりしむみりした気持でかいたにはかいたので捧げても不遜にはならないと思ふ。

第三輯はもっとよくならねばならぬ筈。  
君にひとつ用事が出来た。北里氏の口轄してゐる傳染病研究所の所在地はどこなんだか君の手でわからないかしら。もとはたしか芝白金台町にあつたと思つてゐるが昨年同所が文部省の直轄になつてからどうなつたのか私はわからない。どつかが移轉したことと思ふが。同所の技師に私からたづねたい用件が出来たのだが処がわからないので困つてゐる。電話帳か何かでわからないかしら。いそぎはしないがわかつたらありがたい。所だけわかればいい。  
私の精神境が今一段進めば全治の域に達すると確信してゐるんだが中々そこへゆくには短日月ではだめらしい。努力はしてゐるが。もし□□医者も医薬もないとすれば私は當然それを(精神)待たねばならぬ。しかし医者も医薬のあるかぎり私の弱い心はやつぱりその方へひきづられる。  
私のうちらでは精神力にたよる心と物質力にたよる心とがிரみだれて戦つてゐる。凡人のなきけなさだ。しかしどちらにせよ今のところ病氣を治しきへすれば私は結構なのだ。手段はどつちでもいい。だから一方精神的に○○してゆくと共に薬や療法を一生懸命探してゐる。君をわづらはすのもそのわけだ。  
私はほんとうに身体をよくしなければならぬ。○○全快しても私の精神が私を救つたとのみ言へないと思つてゐる。私の身体には随分莫大な金がかけられた。私はこれを老ひたる父に心から感謝しなければならぬ。私に親が親に對して抱いてゐた不遜な心は消へ去りたどへ何とののしられても父を愛することをいまふかく心に根ざしてゐることを明かにしう。父には私の眞の技量はわからないだらう。それはかなしいことだけれども、私の愛のこころにはかはりはない。  
私は、どうして父の心をなぐさめやうかを、いま考へてゐる。その第一歩はやはり健康を回復することにはじまる。私はしづかに努める。

四月二十六日 恭

× × ×

孝、静(けふ、一緒にかかして貰ふ、別々にかいてもおんなじやうなことなので)ごぶさた。  
ほんとうにすまないと思ふ、からだも悪くはないし手紙もかけなくはなかつたのだのに、ゆるしておくれ、ねちのたるんだ生活をぐずらぐずらつづけてゐた。  
このごろお医者にたよりすぎてゐたてことはほんとだわがみながらいまいますことだ、孝、しっかりするよ、私は努める、医者以上に薬以上に私自身が健康をよびよせてみせる。君のことはみにしみ、わが身かなし、  
「信仰うすきものよ」といふ詠歎をわれとみみづからにみいで、努める、

待つてくれ、きつと征服してやる。もうすこしだ。(すこしづつよくなつてゐるのはほんとだ、その後捻鏡したけれども病菌はなかつた)  
「月映月次展覧」のやうす、うれしく承、繪はがきも眞もありがたく落手、遠くから力んでみもした。うれなくて、ただ疲れを得たことはなきけないが、それよりも2人ともひどく疲れがのこらねばいいがとねがつてゐる。  
いったい「月映」出版と展覧とを両方やうて行くことはあまりいそがしすぎはしないかとおもふ、なにしろ2人だものね、展覧の方を各月にするとか「月映」の方を年4回にするとかした方がよくないのかしら。私だつてわざわざ公衆に接するその機会を少なくしたかれないが、君たちの忙しさがあんじられてね、それともこの忙しさのために芽がどどんのびるといふのなら格別だけれども、忙しいことでは私自身不快なけいけんがあるので心配する。  
孝が四晩も徹夜したといふことは勇ましいけれども悲しくもある、これからそんな無理をしないでほしいと思ふ。これらのことみな感謝の念のほとぼりであることを申しそへておく。  
写真はなつかしくうれしかった、月映写真もだんだん進歩の程がみえてありがたい。3人の方は、孝が「ぼんやりしすぎてゐる」といったけれども、縹渺としていいと思つた、繪画的の気品があると思つた(勿論、紙がいいことが主だけれども)  
これをロマンティックとすれば、も一つの静の肖像の方はドラマティックで面白い、この方面を開拓してゆき、又は他にいろいろ藝術的研究を加味して獨特の月映写真をつくり港屋さんと展覧するといいなとも思はされた、所がこの写真、とめがきいてなかつたとみえて手にとって喜んでゐるうちに茫漠として暗闇裡に消滅してしまつた、大変残念がつてゐるが仕方がない。こんど(次)の展覧に素画を出すのはいい事だが、孝のてがみにある私の池袋時代の素画つてどれを指すの後生だから一、一、品目をあげてほしい、私の記憶にない位だから、いいものでないだらうと思ふ、つまらないのはいやだよ、死んでしまへばしらくてすむわけだがまだ生きてゐるのだから気にかかる、(ほんとうにしらせておくれよ)

あけの灯の<sup>とし</sup>ええまよ  
ふつつり消へよとおもへども  
なまじ東が白らむゆえ  
あきらめられぬと燃えしぶる(執念)

行李のこと、いろいろとすまない。憲にもすまない、静雄にもすまない。孝にもすまない。いろんな意味で



すまないが最も病人のもちものといふ意味ですまながってゐる。君たちがしんせつにあつかつて呉れるだけ二重に心ぐるしくさせられる。一体ならみんな焼いてしまつていいものなんだ。(あのころには病菌の散布するほどの容体でなかったとはおもふが私にそれを主張する資格がない)それを保管したり運んだりしてくれるところもちを思って私は何といふ有難さだらうと思つてゐる。それは孝のところへきてゐるとのこと、ついでに昨年「遺書」のとほりに分けてくれるといいと思ふ、

これとても私はたつてとは言はない、受取つて呉れる人だけは受取つてもらふまでのこと、のこりのものはひまがあったら日光浴をさせてやつて下さい、なつやすみにでもね、

(夏休みのついでに)こしは2人とも休みをどうするの、ここで一寸孝だけにいふ、行李の中に黒表紙の洒落本があるはず、探してとつてほしいとおもふ、いらなければしかたなけれど、何しろ獨身のものにはあつて用なし。又それにはさめた肉筆の拙きざれ繪は火中すること肝要なり。

これらはみな私の痴愚の日のかたみだ。私はそのなまめかしい気分のなかにひとりながら思ふままに性慾を行使した、やんごとなきありのすきびだった。しかしいつまでもそこに低廻してゐるほどのんきではゐられない。ふつりとそのことにわかれてここにあらたなるいそしみにむかふ。

月映六輯についてはその届いた時においていろいろと言ひたかつたが、いまはその気分がどっかへ行つてしまつた。が、すこしいへば、表紙はよかつた、

これについて感じたことは、やはり月刊とする以上毎月清新な版面をその表にのせることは必要だといふ事だった。体裁で買ふやうな人の多いことも賣る方からは考へてみなくてはならない。内容にそそぐ力を表紙にも分けたと思ふ、神戸の金子君からは六輯の面目を一新したことについて讃辭をくれた。(ついでに、神戸では氏の外に「月映」をみてくれる人がたった一人あるさうだこのことも金子君から知らせてくれた、私たちは勉強しなくてはならない。ここでついでにいふ孝がその詩についてあまり遠慮しすぎてはしないかと思ふ、私はたびたびその書信のうちにそへられてくる短詩をみてその清新に欣喜してゐる、私は私一人で詩欄を占めてゐることにあまり讃○をのしてゐる、七輯は出来るなら3人の詩をあつめたいと思ふ)

それから六輯の校正は結構だった、しづをを校正主任に命ずるのはいいことだと思ふが、しづをは恐縮するだらう。

(雨がふつてきた。こっちはいま密柑の花がさきこほ

れてゐる。いい匂が風にまじつてくる。梅の果が大きくなつた。白いかあねーしょんと藍の矢車と眞赤な粟の花。去年のいまころは二度目の臥床に魂、身にはなかつた。恐しいこと、恐しいこと。)

6輯の画、しづをの「すすりなくたましひ」「2つの○思」はするどく出てゐると感じた。「ただよふもの」の下方の白線はもっと力づよく出したかつたのではないかとおもふ、孝の「めぐみになみだす」はよく出てゐると思ふ、「おどる」はすぎる位華かだ。

「1」及「2」は色のきもちが油ずりではささせられてゐるらしいと思ふがいが、油ずりでは「しんじつひとりかがやきめぐる」のごとくすすみと黒との二色が一ぱんよく現はされると思ふ、

單黒色はうまく出るといいが、しづをの「ただよふもの」や「人の世のおもひ」のやうにかすれが出ると大変損な気がする。充分木質を選びたいと思ふ、小鳥のが出てうれしかった、かうしてならべて遜色はないとおもふ、ひいきめかもしれないが、私の病鳥は。遺憾なく冒頭を汚してゐる。(私の父は「はやわかり」がしていいと言つてゐたっけ)この輯の紙は白くつていい。

表紙のVの字がさかさになつてゐるのが馬鹿にうれしくつて桃色の紙をはがしてしまつた、色がおちつて大変いい、うそだと思ふならやつてごらん、逆さVの字が○○にとつての愛○である。

次輯以後について、次輯において内容の体裁をかへるとのことだったがどうかやつてもらいたい、わくなしにするのもいいかと思ふ、又、孝の書翰のやうに横列にするのもいいかと思ふ横列にするならば表紙、とびら、目次ともすべてやつてほしい、(私はこれがさしづめ面白い目新しい法かと思ふ)

マークもあまりながくつづけるのは飽かれるだらう、時々ひっこめるのも一興かしら。

序詩もなるべくしばしばかへたいと思ふ。七輯には、

月にうつるは　バラのゑみ  
バラにうつるは　つきのゑみ  
……………

皐月　霧の夜のそこひ  
などは如何だらう。孝にねがつてもいい。有島さんにさきげるのは孝だけだとしても猶私たち二人も○戒してひとしくつづしみたいとおもふ、  
ねがはくは前輯の踏襲に終らせずしてすっきりとまるであらたな気持ちにしたいと思ふ、遠く鞭撻する

かたばみの　ゆめほのかなる　青き果に  
ふれなばちらむ　種子のあり  
わがうちに　こもりわづらふ　うきうれひ  
いたみしきりて　たへられず  
あおき果の　ふれなばちらむ　種子のごと

ひとふれに　ちりなばちりね　わがいのち  
(白映より)

五月二十二日　恭吉

まだ和泉へゆかぬ、用心してゐるのなり、いづれ近日  
×　　　　　×　　　　　×

憲ちゃん、何といつてもやっぱり手紙したくなつた。今朝起きかけ(七時頃)に丁度、着いた許りの君の手紙をみて、私は君の明快な書きぶり、書かれた事からの不安さとを、身に泌めながら、裏の畑を一巡してきた。そして小母さんについて感ずるあはれさと共に君の煩はしさを気の毒に思つた。

小母さんもこんどはすっかり困つたらしい。それと共に人のなさけがしみじみ身にこたへただらう。君については随分感謝していいわけだと思ふ。人間も困りきらねばいろんな有難さがわからない。(私だつて死ぬ目にあつて健康のありがたみをした馬鹿者だつたが)私の方へは小母さんから一度たよりがあつた。『こまりきつてしまつた、お國の方にいい処があるなら、行くだけはどうかして行く』といふ意味のことまでかいてあつた。その返事に私は「寝とまりする位はお世話出来るが、金のことはどこへ行つたつて思ふやうに行かないだらう」とかいて送つた。それっきり何の沙汰もなかつた。

その手紙は米屋にゐるころ出したものだった。いま君のたよりで藝妓屋にゐるといふことは意外だつた。君が九月上京後、小母さんから一緒になつて呉れといふ願を承諾したことについては全く同情する、私の場合であつてもやはり仕方なくうけがただらうと思ふ。

しかし小母さんは私たちを買取りすぎてゐる。私たちは金を儲けるのに下手な人種で、金をつかふ(尤も普通の人たちからみれば最も賢いつかい方をしてゐるのだが)事に多忙な人間であることがよくのみこめてゐないらしい。ただ在來の行きがかり上、私たちにたよるといふことのみでなく、将来に○のんきなぞみを抱いてゐること——私たちが学校を卒業すればすぐ金が沢山入つてくるといふやうな夢想(私にはその口吻をもらしたことがあつた)をもつてゐる。その夢想は私の病氣のために一たびやぶれ、こんどで二たび破れたことになるが、これが9月もとに似たような生活にもどるとまだぶりがへしてきやしないかしら。私はこの間の手紙で『一人食べる位のことではどうかしてやつてゆけるだらう』との意味をかいておいたが、私たちは自分を忍んでまでも人を幸福にするだけの勇氣もなく  
これはたしか前月の二十五日にかいたとおぼへる、しりきれとんぼだが、気は心だ、  
憲ちゃん、も一つの手紙をかいてから丁度一ヶ月たつ

てしまつた、あれをかきわけて、あんまり愉快な返事でもないで、うっちゃつておいていた。——すまないと思ひながら。この1ヶ月の間に私は病人としてはかなり大きな仕事をした、濱寺の病院へ暫く行つてゐたり又徴兵検査に出かけたりした。そしてわりあひにつかれないのを嬉しく思つてゐたが、又やられてしまつた。自分で不養生をした覚へはないだけにすこしいまいましい。何しろ私は赤い奴を一度に多量に喰き出すのでむしろ痛快な位だ。二十日と二十一日との二度の打撃で大分肉づいてゐた体がもとのもくあみとなる。鏡をみて苦笑してゐる。談話厳禁でまたこの夏を暮すことだ。しかし中々死ななかつてもりである。

「地獄遍路記」とでもいふやうな長編ものをかきかけてゐたが筆をとれないので少々こまる。しかし夏中へたらよくなると思ふ。しばらく便りも出来まい。神戸へかへつても會はれない。心配しながら會つたり話したりするまでもない。「静」に會つたら「またやられた」といつてほしい。あの人たちにも當分書けない。

小母さんから手紙がきた。蒲團のことを書いてあつた。私はあんなのをやいちまつていいと思ふけれど、内の人がなんとか言つてゐる。折があつたら送りかへして呉れるように言つてほしい。小母さんにも手紙をかきたいがめんどうだ。新聞はつきました、ありがたうとつけ加へてほしい。まづこれだけ。床上にて

二十四日

×　　　　　×　　　　　×

昨日の朝の夢に私がウラヂオストックへ行つたの、私のウラヂオストックはちつとも寒くなかつた、けど人っ子一人通らない寂しいまちなんです、そして東京の空が赤くただれてみえました。夢の中の了見では、私は當分、ウラヂオストックに滞在する筈なんです。

十月十九日  
ウラヂオストックより

恩地孝様

×　　　　　×　　　　　×

挿画附言  
朔太郎兄  
私の肉体の分解が遠くないといふ豫覚が私の手を着実に働かせてくれました。兄の詩集の上梓されるころ、私の影がどこにあるかを思ふさへ微笑まれるのです。私はまづ思つただけの仕事をし上げました。

この1年は貴重な附加でした。

附加

〇〇から放たれて

午前中は大方が〇〇〇に暮すので

少量の晝飯をすまして

夕方までの時間が私の天国なのです。

眞夏の太陽と一緒にぎらぎらとひかりながら腹ばって  
画き

いろいろな人がいろんな事をいふ。それが私に何になる  
でせう。

心臓が右の胸でときめき、手が3本あり、指さきに透  
明紋がひかり

二つの生殖器を有する

×?それがたった一つの眞実

蒼白の藝術の微笑です。かの蒼空のよろこびと合一す  
るよろこびです。

(註)

- ①友人、香山小鳥
- ②E・T、イニシャルのみわかっている。
- ③恩地孝四郎を指す。
- ④当時、恩地家の屋敷が、小田原にもあった。
- ⑤三並花弟。ヒュウザン会出品者。
- ⑥藤森静雄を指す
- ⑦東京時代踏をしていた老婆、若林かつを指す。
- ⑧従兄、山本俊一宛。

# 1 主要行事

4月3日～4月21日	昭和50年度前期、近代美術館常設展
4月25日～5月5日	第13回県美術家協会展（県美術家協会と共催） 第1期＝4月25日～29日〈日本画・工芸・書・生花〉 第2期＝5月1日～5日〈洋画・彫塑・写真・現代造形〉
5月17日～5月19日	第2回移動美術館一御坊展（御坊市教育委員会と共催）
5月18日	近代美術館友の会評議員会
6月15日	「ドーミエ展」「屏風絵と竹の美展」鑑賞バスツアー（近代美術館友の会主催）
7月12日～7月13日	山陰路文化の鑑賞バスツアー（近代美術館友の会主催）
8月21日～8月25日	第10回県立近代美術館友の会展（近代美術館友の会と共催）
9月10日～9月15日	第8回和歌山県勤労者美術展（和歌山県と共催、日本画他6部門）
10月4日～10月26日	木下孝則回顧展（近代美術館主催）
11月13日～12月1日	第29回県展（県教育委員会、毎日新聞和歌山支局と共催） 第1期＝13日～17日〈日本画、書、生花〉 第2期＝20日～24日〈洋画、彫塑〉 第3期＝27日～12月1日〈工芸、写真、現代造形〉
12月13日～12月15日	第29回県展新宮地方展〔新宮市教育委員会が共催に加わる。各部門選抜（除生花）〕
1月10日～2月22日	昭和50年度後期、近代美術館常設展
2月11日～2月15日	第9回県立近代美術館友の会習作展（近代美術館友の会主催）
2月28日～3月21日	「1910年代における京都日本画の新動向」展（近代美術館主催）

## 2 主催展覧会

### □ 昭和50年度前期 県立近代美術館常設展

会 期 4月3日～4月21日（毎週火曜日休館）  
新収蔵版画を主体とする版画を展覧

#### 出品目録

1	前田政雄	カンナ	木版・紙	42.0×30.0	
2	"	蔵王火口湖	"	45.0×59.5	1953
3	下沢木鉢郎	朝富士（焼津）	"	30.0×39.5	
4	"	碓ヶ関	"	23.5×33.0	
5	畦地梅太郎	谷間の声	"	49.5×37.0	1966
6	"	青 凍	"	69.0×46.0	1960
7	笹島喜平	森 No.18	"	45.0×60.0	1961
8	"	西六寺四天堂	"	45.0×45.0	1972
9	橋本興家	菖蒲と少女	"	39.0×54.5	1952
10	斎藤 清	京の壁 A	"	48.5×78.5	1960
11	"	唐招提寺 C	"	75.5×45.5	1959
12	平塚運一	興福寺南円堂	"	45.5×37.0	1941
13	"	高野山奥の院	"	37.5×45.5	1960
14	稲垣知雄	収穫の記録	"	46.0×60.5	
15	"	ランプ	"	53.0×41.0	
16	山口 進	生 家	"	43.0×58.5	1966
17	"	秋立つ頃	"	39.0×54.5	1959
18	星 襄一	大 樹	"	64.0×64.0	1974
19	"	漂 (A)	"	45.0×61.0	1962
20	田中恭吉	あをぞら	"	16.5×12.0	1914
21	水船六洲	冬の門	"	41.3×53.0	
22	品川 工	転 身	"	56.0×43.0	
23	"	息吹き	"	61.5×45.0	1959
24	萩原英雄	悪の華	"	57.7×40.5	
25	"	白 蛾	"	66.0×39.5	1959
26	上野 誠	焼けた五重塔	"	58.5×43.3	1957
27	山口 源	Roundabout (迂)	"	87.5×59.0	1959
28	"	Germination (萌芽) 崩	"	83.8×45.5	1959
29	馬淵 聖	土器つぼとはち	"	54.5×39.3	1957
30	"	みかん	"	56.0×40.6	1962
31	関野準一郎	志賀直哉像	"	67.0×53.0	
32	"	水族館	"	57.0×45.0	
33	石井柏亭	室 内	石版・紙	27.5×42.0	1957
34	北川民次	タスコの裸婦	木版・紙	27.0×44.0	1941
35	"	メキシコの浴み	"	27.0×31.0	1941
36	宇治山哲平	段々島と無花果	"	23.0×31.5	
37	小野忠重	灯台の道	"	59.5×45.5	1951
38	"	あれる	"	45.0×61.0	1960
39	"	船つくり	"	60.5×44.5	1965

### ○ 第2回移動美術館—和歌山の作家を中心として—

本県の地理的状況から広く一般県民に館蔵作品等を展覧し、美術に対する関心の昂揚を図るため、本年度は御坊市で開催した。（入観者 500人）

会 期 5月17日～5月19日 / 会 場 御坊市・紀州信用金庫大ホール

主 催 和歌山県立近代美術館 御坊市教育委員会

後 援 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館友の会 御坊市

#### 出品目録

1	野長瀬晩花	スペインの田舎の子供	カンレイシャ着色・屏風	136.0×110.0	1924
2	日高昌克	山峡池畔図	紙本・水墨 (二曲単双)	44.0×56.0	1955
3	小野竹喬	春 芽	紙本・着色	45.0×37.9	1972
4	稗田一穂	流 翳	"	162.1×112.1	1962
5	保田龍門	裸婦立像	油彩・キャンバス	81.0×65.0	1921
6	"	読 書	"	65.0×53.0	1921
7	原 勝四郎	画工像	油彩・ボール紙	65.0×53.0	
8	"	瀬戸風景	"	65.0×53.0	1935
9	"	小 湾	"	70.0×82.0	1940
10	"	裸 婦	油彩・キャンバス	56.3×63.0	1960
11	碓 伊之助	村の入口	"	65.5×92.0	1924
12	"	ひまわり	"	100.0×80.5	1942
13	木下義謙	婦人像	"	116.5×73.3	1928
14	"	九谷の溪流	"	91.5×122.0	1945
15	川口軌外	黄 壁	"	59.2×72.3	1927～1928
16	"	静 物	"	115.1×78.7	1932
17	"	二 婦	"	161.5×130.0	1939
18	"	日傘と人	"	119.5×89.6	1953
19	石垣栄太郎	街	"	147.0×106.0	1925
20	"	スケッチクラス	"	56.0×72.0	1947
21	高井貞二	作 品	"	137.0×132.0	1962
22	"	スリーサークル	"	131.5×176.5	1962
23	ヘンリー杉本	FAITH LOVE HOPE	"	162.0×130.0	1966
24	"	秋のバリ	"	140.0×130.0	1965
25	浜口陽三	毛糸とトリコット	メゾチント	24.3×51.9	1962
26	"	ぎくろ	"	29.2×44.0	1958
27	"	19と1つの桜桃	"	23.2×53.2	1965
28	"	赤い鉢と桜桃	"	47.0×62.0	1966
29	吉田政次	憂愁の空 No.2	"	43.5×72.0	1957
30	"	空間 No.50	ウッドカット	45.0×43.0	1965
31	"	ミニとデモの時代 No.1	"	87.0×72.0	1968
32	保田春彦	作 品	シルクスクリーン		1971
33	"	作 品	"		1971
34	村井正誠	僧	"	75.0×56.0	1973
35	"	太陽と鳥	"	75.0×56.0	1975
36	保田龍門	アンドレの首	ブロンズ	19.0 (H)	1922
37	"	仰臥女	"	15.0 (H)	1948
38	建島大夢	恩師の顔	"	35.0 (H)	1939
39	"	おゆのつかれ	"	66.7 (H)	1913

## □ 木下孝則回顧展

会期 10月4日～10月26日 (入観者 2,027人)

主催 和歌山県立近代美術館 / 後援 御坊市 御坊市教育委員会 日高地方教育委員会連絡協議会 日高地方  
美育協会 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館友の会  
郷土作家シリーズの一環として堅実な写実的作風によって知られる木下孝則をとりあげた。

木下孝則は、学習院を経、京都大学法科、東京大学文科に学んだが、油絵への志向捨てがたく、中退して画業に  
入り、大正10年欧州に留学、同12年帰朝後二科に出品し、13年に樗牛賞、14年二科賞を受賞した。同15年に1930  
年協会の結成に参加し、春陽会会員にもなったが、昭和3年から10年まで再び渡仏し、二科会員を経て一水会に  
加わり、戦後は同会委員、日展評議員等をつとめている。48年に没した。

本展覧会は、少年期から晩年までの、木下孝則の主要作品110点を展覧し、生涯にわたっての彼の作風の展開を  
概観しようとしたものである。

### 出品目録

1	時計のある静物	油彩・キャンバス	44.5×33.5	1914	
2	樹蔭読書(イヴォンヌ)	"	52.5×64.0	1921~5	
3	後向きの裸婦習作	"	100.2×80.0	1925	第12回二科会展
4	女優の像	"	72.0×53.0	1926	第5回春陽会展
5	K男爵夫人像	"	91.3×72.8	1926	第1回聖徳太子奉讃展
6	マダム・オコノエ	"	43.0×37.0	1931	
7	読書	"	92.0×73.0	1931~2	サロン・ドートンヌ
8	幼児像	"	33.0×24.0	1931~5	
9	エレロ夫人	"	72.0×58.0	1935	
10	立裸像	"	100.0×81.0	1932	
11	裸婦ナックレ	"	73.2×91.2	1932	第23回二科会展
12	赤衣の女	"	73.0×54.0	1934	サロン・ドートンヌ
13	I氏肖像	"	73.0×61.0	1931	1931アンデパンダン
14	少女読書	"	59.5×49.0	1940	第5回京都市展
15	N嬢像	"	90.9×72.7	1941	第4回文展
16	読書	"	60.5×50.0	1942~7	
17	読書	"	60.5×50.0	1942~7	
18	読書	"	60.5×50.0	1942~7	
19	室内	"	40.8×31.8	1942~7	
20	婦人像	"	40.0×82.3	1942~7	
21	肖像	"	99.0×71.5	1946	第5回日展
22	水蓮	"	18.0×34.0	1946	
23	母子像	"	91.4×73.1	1946~7	
24	菊	"	72.7×90.9	1949	
25	A氏像	"	52.7×45.6	1949	
26	A夫人像	"	65.0×50.0	1949	
27	幼児	"	27.3×22.0	1949頃	
28	N君像	"	65.0×50.0	1950	第12回一水会展
29	女	"	90.9×72.7	1951	
30	プロフィール	"	45.0×36.0	1952~3	第15回一水会展
31	婦人像	"	20.4×17.2	1952~3	
32	朝の食卓	"	60.5×50.0	1952~7	
33	バレリーナ	"	60.5×50.0	1952~7	
34	バレリーナ	"	60.5×50.0	1952~7	
35	読書	"	43.3×38.2	1952~7	

36	ソファに憩う女	油彩・キャンバス	40.8×31.8	1952~7	
37	読書	"	60.5×50.0	1952~7	
38	読書	"	60.5×50.0	1952~7	
39	読書	"	41.2×24.5	1952~7	
40	憩	"	60.5×50.0	1952~7	
41	憩	"	60.5×50.0	1952~7	
42	踊り子	"	43.3×38.2	1952~7	
43	椅子による少女	"	60.5×50.0	1952~7	
44	バレリーナ	"	60.5×50.0	1952~7	
45	読書	"	72.7×60.6	1953	伊勢神宮遷宮記念作品
46	婦人像	"	37.2×28.6	1955	
47	静物	"	53.0×45.5	1955	
48	カーネーション	"	72.7×60.6	1955	
49	静物	"	31.8×40.9	1955	
50	M君像	"		1956	
51	静物(カーネーション)	"	90.9×72.7	1957	
52	読書	"	53.0×45.0	1957~60	
53	室内少女	"		1958	第1回日展
54	婦人像	"	116.5×91.0	1959	第2回日展
55	読書	"	95.0×115.0	1959	
56	菊	"	72.2×60.5	1959~63	
57	S夫人像	"	115.5×91.0	1960頃	
58	靴下をはく女	"	91.2×72.7	1961	第1回一水会委員長
59	化粧	"		1961	第4回日展
60	バレエダンサー	"	131.0×80.5	1961頃	
61	静物	"	53.0×73.0	1961頃	
62	バラ	"	117.0×73.0	1961~2	
63	婦人像	"		1962	第24回一水会展
64	裸婦	"		1962	第24回一水会展
65	マガジンを見る女	"		1962	第24回一水会展
66	立てるバレエダンサー	"	66.0×54.0	1962	
67	バレエダンサー	"	133.0×99.0	1962頃	
68	窓辺のバラ	"	53.0×45.5	1962~5	
69	バラ	"	33.4×24.2	1962~5	
70	立てる裸婦	"		1963	第25回一水会展
71	バラ	"	61.0×73.0	1963頃	
72	バラ	"	62.0×51.0	1963頃	
73	婦人像	"		1963	第6回日展
74	Giselle	"	72.0×64.0	1964	第3回一水会委員長
75	ピアノによるバレエダンサー	"		1964	第26回一水会展
76	ヴァイオリンをひく女	"	116.7×91.0	1964	第26回一水会展
77	ばら	"	72.7×53.0	1964	第1回太陽展
78	芍薬	"	90.0×72.0	1964頃	
79	アイリン	"	91.1×72.5	1965	第27回一水会展
80	黒衣婦人	"	91.5×115.3	1965	第8回日展
81	菊	"	32.0×41.0	1966頃	
82	ベビードール	"	81.0×132.0	1967	第29回一水会展
83	ピンクネグリジェ	"	91.0×116.3	1968	第30回一水会展

84	鶴見川上流	油彩・キャンバス	45.5 × 60.5	1968	第5回太陽展
85	ディバンの裸婦	〃	91.0 × 116.3	1969	第31回一水会展
86	水色のバレダンサー	〃	116.3 × 91.0	1969	改組第1回日展
87	裸婦とネグリジェ	〃	91.0 × 116.3	1970	第32回一水会展
88	バレダンサー	〃	116.5 × 91.2	1970	第2回日展
89	ピアノによるバレダンサー	〃	91.1 × 72.6	1971	第33回一水会展
90	H婦人像	〃		1972	第34回一水会展
91	デッサン(裸婦)	パステル・紙			
92	〃(裸婦)	鉛筆・紙			
93	〃	〃			
94	デッサン(足)	〃			
95	デッサン(バレダンサー)	〃			
96	デッサン(婦人像)	〃			
97	〃	〃			
98	〃	〃			
99	〃	〃			
100	〃	〃			
101	〃	パステル・紙			
102	〃	〃			
103	デッサン(仰臥する女)	〃			
104	デッサン(和服の女)	〃			
105	デッサン(ヴァイオリンをひく人)	〃			
106	デッサン	鉛筆・紙			
107	デッサン	〃			
108	デッサン	〃			
109	牛にのる女	木版・紙			
110	裸婦	陶器	37×21×13	1967頃	

## □ 昭和50年度後期 県立近代美術館常設展

会期 1月10日～2月22日(毎週火曜日、祝日の翌日休館)

館蔵品を主体とする本県出身作家の絵画(油彩画、日本画)を展覧

### 出品目録

1	野長瀬晩花	スペインの子供	紙本着彩・屏風	136.0×110.0	1924	第4回国画創作協会展
2	〃	五月の庭	紙本着彩・額	77.0×137.5	1956	
3	亀井玄兵衛	みのり	〃	165.0×122.0	1961	第33回青龍社展
4	〃	観音立像	〃	121.0×74.5	1965	第37回青龍社展
5	〃	白梅	〃	120.0×71.0	1968	第7回東方美術協会展
6	川口軌外	風景	油彩・キャンバス	65.0×80.5	1924	
7	〃	裸婦	〃	91.5×73.0	1927～9	
8	〃	花	〃	115.0×88.8	1932	
9	〃	光	〃	115.0×80.0	1950	第24回国画会展
10	〃	樹間と鳥	〃	193.0×130.0	1958	第3回現代日本美術展
11	碓伊之助	村の入口	〃	65.5×92.0	1924	第5回春陽会展
12	〃	ひまわり	〃	100.0×80.5	1943	第7回一水会展
13	木下孝則	女優の像	〃	72.0×53.0	1926	第5回春陽会展
14	〃	A氏像	〃	52.7×45.6	1949	
15	木下義謙	横たはれる裸婦	〃	76.5×121.0	1926	第13回二科会展
16	〃	九谷の溪流	〃	91.5×122.0	1945	

17	石垣栄太郎	女の顔	油彩・キャンバス	26.0×20.0	1916	
18	〃	街	〃	122.0×90.0	1925	全米独立展
19	〃	スケッチスラス	〃	56.0×72.0	1947	
20	原勝四郎	画工像	油彩・ボール紙	65.0×53.0	1932	第19回二科会展
21	〃	小湾	〃	70.0×82.0	1940	第27回二科会展
22	〃	バラ	油彩・ベニヤ板	45.0×53.0	1956頃	
23	稗田一穂	月下	紙本着彩	178.0×229.0	1974	第1回創画会展
24	〃	流鶯	〃	162.1×112.1	1962	第26回新制作展

## □ 1910年代における京都日本画の新動向

会期 2月28日～3月21日(入観者 1,340人)

主催 和歌山県立近代美術館 / 後援 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館友の会

「1910年代における京都日本画の新動向」展は、昭和46年3月に本館で開かれた「大夢・晩花」展の延長上に生まれた企画である。1910年代初め、野長瀬晩花と相前後して京都画壇に登場した若い日本画家達は、19世紀ヨーロッパの芸術思潮の影響を受け、個性の確立と自由な創作を主張して、近代人の視覚で自然や人間古典などの主題をとらえ、新しい日本画の創造を志向した。

このような風潮の中から形成されたのは国画創作協会であるが、国画創作協会として結実する以前の広汎な新時代への胎動を含めて、1910年代の京都日本画の新しい動向を作品によってうかがおうとしたのが本展覧会の意図であった。

### 出品目録

1	伊藤草白	島		1918(大7)	第1回国展
2	稲垣伸静	霰日		1920(大9)	絵専卒業制作
3	入江波光	北野の裏の梅		1911(明44)	絵専卒業制作 第16回新古美術品展
4	〃	振袖火事		1913(大2)	
5	〃	北野梅林		(大初)	
6	〃	美人図		1918(大7)	
7	〃	臨海の村		1919(大8)	第2回国展
8	〃	彼岸		1920(大9)	第3回国展
9	岡本神草	口紅		1918(大7)	第1回国展
10	小野竹橋	南国		1911(明44)	第1回国展 仮面会
11	〃	秋(南国四季)		1911(明44)	
12	〃	吉田山付近		1912(明45)	
13	〃	島二作		1916(大5)	第10回文展特選
14	〃	波切村		1918(大7)	第1回国展
15	甲斐莊楠音	横櫛		1918(大7)	第1回国展
16	〃	美人図		(大中)	
17	梶原緋佐子	暮れゆく停留所		1918(大7)	第1回国展
18	金田和郎	水蜜桃		1918(大7)	第1回国展 樗牛賞
19	粥川伸二	紅毛散策図			
20	榊原佳山	あかつち山		1911(明44)	絵専卒業制作
21	榊原始更	作品			
22	榊原紫峰	群猿		1910(明43)	
23	〃	南国の一隅における曲と眠り		1912(明45)	
24	〃	失題		(大初)	
25	〃	白梅		1915(大4)	第9回文展
26	〃	赤松		1919(大8)	第2回国展
27	杉田勇次郎	海近く		1920(大9)	第3回国展
28	土田麦選	髪		1911(明44)	絵専卒業制作 第5回文展

29	〃	散 華	1914 (大3)	第8回文展
30	〃	梅ヶ畑村	1915 (大4)	竹杖会
31	〃	早春の伊豆	1917 (大6)	
32	〃	舞 妓	1919 (大8)	
33	野長瀬晩花	被布着たる少女	1911 (明44)	第16回新吉美術品展
34	〃	島の女	1916 (大5)	
35	〃	門つけ	1916 (大5)	
36	〃	戻り橋	1917 (大6)	
37	〃	初秋の頃	1917 (大6)	
38	〃	初夏の流れ	1918 (大7)	
39	秦 輝男	落 葉	1911 (明44)	
40	〃	母 子	1918 (大7)	
41	〃	血の色池	1919 (大8)	
42	〃	吉 原	1921 (大10)	
43	〃	吉原の女	(大9頃)	
44	星野空外	淀 川	1912 (明44)	絵専卒業制作 第16回新吉美術品展
45	松宮芳年	堺の相生橋	1911 (明44)	絵専卒業制作 第16回新吉美術品展
46	丸岡比呂史	露次の細路	1916 (大5)	絵専卒業制作
47	村山華岳	二月の頃	1911 (明44)	絵専卒業制作 第5回文展
48	〃	富士之天女	1914 (大3)	
49	〃	婦女之図	1914 (大3)	
50	〃	定九郎	1914 (大3)	
51	〃	梅溪山道	1914 (大3)	
52	〃	仏陀枯華図	1916 (大5)	
53	〃	アジャント壁画模写	1916 (大5)	
54	〃	操り人形道成寺	1916 (大5)	
55	〃	二人舞妓	1918 (大7)	
56	〃	聖者の死 (画稿)	1918 (大7)	第1回国展
57	森下南人子	艶 麗	1913 (大2)	絵専卒業制作
58	山下麻耶	ユーカーの図	1913 (大2)	絵専卒業制作
59	竹久夢二	合作 お夏清十郎	1917 (大5)	
野長瀬晩花				
秦 輝男				
60	入江波光	合作 扇面戯画	1911 (明44)	
榊原佳山				
榊原紫峰				
星野空外				
村上華岳				
〔参考出品〕				
62	河合卯之助	自画像 (油絵)	1913 (大2)	
63	〃	婦人面 (油絵)	1913 (大2)	
64	〃	転法輪 (版画)	1913 (大2)	
65	〃	茶畑 (版画)	1914 (大3)	
66	〃	機敷 (版画)	1914 (大3)	
67	松宮芳年	風景 (油絵)	1913 (大2)	
68	〃	風景 (油絵)	1913 (大2)	
61	野長瀬晩花	婦人像 (油絵)	1913 (大2)	

## 3 共催展覧会

### ○第13回和歌山県美術家協会展

和歌山県美術家協会々員による総合美術展  
 会 期 第1期—4月25日～29日 (生花、書、日本画、工芸) 第2期—5月1日～5日 (洋画、彫塑、現代造形、写真)  
 主 催 和歌山県美術家協会 和歌山県立近代美術館 / 後 援 朝日新聞和歌山支局、和歌山県立近代美術館友の会

### ○昭和50年度 和歌山市美育協会春の写生展

和歌山市内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校の児童生徒の写生画展  
 会 期 6月19日～23日 (一般、中展示室) / 主 催 和歌山市美育協会 和歌山県立近代美術館

### ○第10回和歌山県立近代美術館友の会展

県立近代美術館の友の会活動の一環として行なうアマチュア総合美術展 (日本画、洋画、工芸、書、写真、生花)  
 会 期 8月21日～25日 (大、中、小展示室)  
 主 催 和歌山県立近代美術館友の会 和歌山県立近代美術館 / 後 援 和歌山県美術家協会

### ○第7回和歌山県勤労者美術展

本県勤労者の美術文化の向上を図るため、勤労の余暇に制作した美術作品を展示  
 会 期 9月10日～15日 (日本画、洋画、彫塑、工芸、書、写真、生花)  
 主 催 和歌山県 和歌山県立近代美術館 / 後 援 和歌山県美術家協会 和歌山県労働者福祉協議会 和歌山県経営者協会

### ○第29回和歌山県美術展覧会

県民の美術に関する愛好心と鑑賞力を啓発し、美術作品の創作意欲の昂揚をはかり、本県における美術文化の向上発展に資するため開催する公募展 (第8回県民文化祭参加)  
 会 期 第1期—11月13日～17日 (日本画、書、生花)  
 第2期— 〃 20日～24日 (洋画、彫塑)  
 第3期— 〃 27日～12月1日 (工芸、写真、現代造形)  
 新宮展—12月13日～15日 (各部門選抜〔除生花〕) / 於・新宮市民会館  
 主 催 和歌山県教育委員会 和歌山県立近代美術館 毎日新聞和歌山支局 新宮市教育委員会 (新宮展)  
 主 管 和歌山県美術家協会 / 後 援 和歌山県 新宮市 (新宮展)

### ○第23回県下高校総合芸術祭書道美術展

県下の各高等学校が参加して開催する総合芸術祭行事の美術部門 (第8回県民文化祭参加)  
 会 期 美術展—12月11日～15日 (一般、中、小展示室) 絵画、商業デザイン、彫塑  
 書道展— 〃 18日～22日 (大、中、小展示室)  
 主 催 和歌山県高等学校芸術科教育連盟 和歌山県立近代美術館

### ○第9回和歌山県立近代美術館友の会習作展

和歌山県立近代美術館友の会の昭和50年度各実技講座活動の総括展 (日本画、洋画、写真、陶芸)  
 会 期 2月11日～15日 (一般、中、小展示室)  
 主 催 和歌山県立近代美術館友の会 和歌山県立近代美術館 / 後 援 和歌山県美術家協会

# 4 貸館展覧会

会 期	名 称	概 要	展 示 室
4月3日～4月7日	第22回洗心書道展	書／西林凡石門下	一／中／小
10日～14日	和大総合美術展	絵画・書、写真、生花／和歌山大学	一／中／小
17日～21日	和昌会書道展	書／県立和歌山商業高校OBグループ	一般展示室
17日～21日	グループ「波」展	洋画／グループ「波」	中展示室
5月9日～5月14日	野鳥愛護ポスター作品展	ポスター／和歌山県自然保護課	大展示室
15日～19日	有人クラブ写真展	写真／駒木根紅花主宰	一般展示室
15日～19日	漆と花展	漆芸、生花／橋爪靖雄主宰	小展示室
22日～26日	黎明クラブ写真展	写真／明楽光三郎主宰	一般展示室
22日～26日	寒川栖豊一門展	陶芸／寒川栖豊門下	大展示室
22日～26日	第40回木国写友会展	写真／島村安彦主宰	中展示室
29日～6月2日	第11回葵フォトグループ展	写真／亀忠男主宰	一般展示室
29日～2日	睦林会南画展	日本画／睦林会	大展示室
29日～2日	和大絵画部1・2回生グループ展	洋画／和歌山大学絵画部1・2回生	中展示室
29日～2日	グループ「しつ」展	漆芸／漆器同好グループ	小展示室
6月5日～9日	全書研 県下小中高総合展	書／和歌山書道教育連盟	全館
12日～16日	示現会和歌山巡回展	中央展作品（選抜）と支部会員作品	全館
19日～23日	和大絵画部3回生グループ展	洋画／和歌山大学絵画部3回生	小展示室
7月2日～7月6日	第24回和歌山市美術展・第1期	洋画、彫塑、写真／和歌山市教育委員会	全館
9日～13日	同上 第2期	日本画、工芸、書、生花	全館
17日～21日	杏林美術展	絵画、工芸等／和歌山市医師会グループ	一般展示室
17日～21日	日曜画家展	洋画／日曜画家グループ	中展示室
17日～21日	和興会書道展	書／山本興石主宰	小展示室
24日～28日	洋画12人展	洋画／同好グループ	一般展示室
24日～28日	エトアール洋画展	洋画／エトアール洋画会	大／中／小
31日～8月4日	オール関西フォトグループ展	写真／関西在住写真家グループ	一展／小展
31日～4日	関西二紀彫刻展	彫刻／関西二紀会	大展示室
31日～4日	形成展	洋画／同好グループ	中展示室
8月7日～11日	海南高校OB展	洋画／海南高校OB美術グループ	一般展示室
7日～11日	第7回絵画サークル「樹」展	洋画／絵画サークル「樹」	大展示室
7日～11日	星墨会展	書／県立星林高校OBグループ	中展示室
7日～11日	第2回律の会洋画展	洋画／齋田武夫主宰洋画グループ	小展示室
14日～18日	第3回高校教員美術展	洋画、彫塑／県下高校美術教員	中展示室
14日～18日	Primitive（プリミティブ）	絵画、デザイン／和歌山出身県外在住学生	
21日～25日	グループ旺美洋画展	洋画／和歌山成人学級絵画教室OB	一般展示室
28日～9月1日	第18回花王展	絵画、書、写真、手芸等／花王石齡文化祭	一展／大展
28日～1日	青樹会展	日本画／青樹会	中展示室
28日～1日	アトリエオノOBグループ展	洋画／アトリエオノOBグループ	小展示室
9月18日～22日	第9回三光会日本画展	日本画／山東光風主宰	全館
26日～29日	第4回オークレイ和歌山展	絵画、手芸／田中善弘主宰	一般展示室
26日～29日	第24回県下高校商業美術展	ポスター、デザイン等／県商業教育研究会	大展示室
26日～29日	新世紀和歌山展	洋画／新世紀和歌山グループ	中展示室

27日～28日	健筆会書道習作展	書／健筆書道会	小展示室
10月2日～10月7日	県民文化祭参加 紙人形展	紙人形／紙人形展実行委員会	一般展示室
9日～12日	第16回和歌山旺玄美術展	洋画／旺玄会和歌山クラブ	一般展示室
14日～19日	県文化祭参加 サークル連合展	洋画、日本画／県美術サークル連絡協議会	一般展示室
21日～26日	県民文化祭参加 俳画展	俳画／県俳画協会	一般展示室
30日～11月3日	同上 県文化協会美術展	絵画、書、写真／県文化協会	一／中／小
12月4日～12月8日	同上 写真展	写真／全日本写真連盟和歌山支部	一般展示室
4日～8日	あくど展	洋画／中学校美術科教員グループ	中展示室
4日～8日	手あみ手芸作品展	手芸／綾部道代手あみ手芸教室	小展示室
11日～15日	和歌山大学絵画部長	洋画／和歌山大学絵画部	大展示室
18日～22日	新県民運動書道展	書／県下小、中、高校生作品	一般展示室
1月15日～1月19日	花王石齡絵画部・写真部合同展	洋画、写真／花王石齡絵画部写真部	一般展示室
22日～26日	新構造社和歌山支部展	洋画／新構造社和歌山支部	一展／小展
22日～26日	和歌山大学書道部展	書／和歌山大学書道部	中展示室
31日～2月2日	市和商デザイン科卒業制作展	絵画、商業デザイン／和歌山市立商業高校	一／中／小
2月5日～8日	きりがみ展	きりがみ画／中国きりがみ同好グループ	一般展示室
5日～9日	やまびこ展	絵画、彫塑／和歌山市小中高教員グループ	中展示室
19日～23日	まごころ写真展	写真／同好グループ	中展示室
19日～23日	和大美術専攻生卒業制作展	洋画、彫塑／和歌山大学絵画部	一般展示室
3月4日～3月8日	第6回県高校書道科教員書作展	書／県高校書道研究会	一般展示室
18日～22日	アトリエオノグループ展	絵画、造形／アトリエオノ卯グループ	一般展示室
25日～29日	第36回国際写真サロン展	写真／全日本写真連盟	一般展示室

# 5 普及活動

## 「美術館だより」

「美術館だより」は館の広報紙である。館主催、共催展示会の紹介及び解説、友の会の行事案内や活動報告、和歌山の美術文化関係のニュース、貸館展示会や随筆等を掲載している。発行部数2,100部。

号No	発行日	主要記事
112号	4月1日	瑞芝焼について(中村貞史)
113号	5月1日	就任あいさつ(堀亨) 退職あいさつ(渡辺光男) 美術随感(齊田武夫) 美術館だよりの編集をはなれて(南川諄一) 春の油絵写生大会
114号	6月1日	瑞芝焼についてII(中村貞史) 友の会バスツアー「ドーム展」
115号	7月1日	座談会「エトアール洋画会半世紀のあゆみ」(司会 酒井哲朗) 和歌山洋画発祥の頃(堀内喜市朗) 友の会バスツアー「山陰路文化の旅」
116号	8月1日	漂える魂の軌跡—版画家田中恭吉について(橘喜久雄) 県展開催要項 友の会展開催要項
117号	9月1日	木下先生の思い出(佐伯久) わが夫・孝則のこと(木下米) 声

## 「友の会活動」

和歌山県立近代美術館友の会は、アマチュアの美術愛好家で組織され、年間を通じて、県民の美的素養の向上に寄与する諸活動を行なっている。昭和40年10月発足。51年3月末現在の会員数は1,020人(一般会員944人、賛助会員76人)。

(注 行事名、期日、〈テーマ〉、講師、参加人員の順に記載。)

〔美術鑑賞講座〕

4月20日	〈わが国の近代版画列品解説〉 太田将勝 15人
5月18日	〈浄妙寺見学〉 和高伸二 30人
7月12日~13日	〈山陰路文化の旅〉 和高伸二 51人
9月27日~29日	〈越前の風土と窯元をたずねて〉 山本学 42人

雪画の展開(県立博物館学芸課) 県展応募のてびき コレクション (八幡三郎)

119号	11月1日	大橋さんを偲ぶ(齊田武夫) 故大橋知事を偲んで(玉井一郎) 自己に厳しい有本廓(堀内喜市朗) 「何か」を求めて(益山英吾) 県展日程表 「野長瀬晩花」発刊紹介
120号	12月1日	県展の記録 回想—1930年協会のころ(小島善太郎)
121号	1月1日	新年のあいさつ(齊田武夫、玉井一郎、堀亨) 友の会習作展開催要項 1976年の近代美術館主催展
122号	2月1日	「1910年代における京都日本画の新動向」展について(酒井哲朗) 回想—1930年協会のころII(小島善太郎) 宮本諄一君の思い出(堀内喜市朗)
123号	3月1日	「1910年代における京都日本画の新動向」展についてII(酒井哲朗) 昭和50年度文化功労賞(碓伊之助)

〔洋画実技講座〕

4月20日	〈花と果物のある静物〉 若林昌峰 42人
5月11日	〈新緑の和歌山公園を描く〉 齋田武夫 浜田邦男、山東好夫、46人
6月22日	〈初夏の玉津島・片男波を描く〉 山東好夫 30人
7月20日	〈夏景色の根来寺を描く〉 浜田邦男 29人
8月17日	〈コスチュームの女性像を描く〉 小川英夫 46人

9月20日~21日	〈初秋の南部海岸を描く〉 益山英吾 浜田龍夫 21人
10月12日	〈秋色の紀北を描く〉 山東好夫 23人
11月16日	〈紀三井寺から和歌浦を望む〉 若林昌峰、39人
12月21日	〈静物画のいろいろI〉 八幡三郎 32人
1月18日	〈静物画のいろいろII〉 浜田邦男 46人
2月15日	〈コスチュームの女性像を描く〉 小川英夫 43人
3月14日	〈静物画のいろいろIII〉 浜田邦男 23人 〔日本画実技講座〕
4月20日	〈花鳥画の基本〉 青木虹興 42人
5月18日	〈写生画の基本〉 古村徹三 41人
6月22日	〈写生画の基本〉 古村徹三 46人
7月20日	〈写生画の基本〉 古村徹三 38人
8月10日	〈写生画の基本〉 古村徹三 30人
9月21日	〈加太自然郷の写生〉 古村徹三 30人
10月12日	〈写生画の基本〉 古村徹三 20人
11月24日	〈山水画の基本〉 寺口関山 25人
12月14日	〈山水画の基本〉 寺口関山 42人
1月18日	〈山水画の基本〉 寺口関山 38人
2月15日	〈山水画の基本〉 寺口関山 44人
3月14日	〈和歌浦風景を描く〉 寺口関山 30人 〔写真実技講座〕
4月18日	〈月例コンテストと作品指導〉 西川高三 10人
4月29日	〈新緑の温山荘モデル撮影会〉 西川高三 20人
5月18日	〈月例コンテストと作品指導〉 駒木根紅花 8人
6月9日	〈粉河寺、根来寺周辺風景とモデル撮影会〉 駒木根紅花 16人
7月13日	〈月例コンテストと作品指導〉 駒木根紅花 11人
8月10日	〈ヌードの撮り方〉 西川高三 18人
8月17日	〈月例コンテストと作品指導〉 西川高三 10人
9月14日	〈月例コンテストと作品指導〉 (前期コンテスト表彰式) 西川高三 13人
10月17日	〈月例コンテストと作品指導〉 亀忠男 10人
10月19日	〈みさき公園を撮る〉 亀忠男 14人
11月16日	〈月例コンテストと作品指導〉 亀忠男 8人
12月21日	〈月例コンテストと作品指導〉 木村太郎 9人
1月18日	〈新春月例コンテストと作品指導〉

2月8日	〈月例コンテストと作品指導〉 亀忠男 8人
2月15日	〈湖東の雪景を撮る〉 亀忠男 10人
3月21日	〈月例コンテストと作品指導(後期コンテスト表彰式)〉 亀忠男 8人 〔陶芸実技講座〕
4月13日	〈初歩の陶芸制作〉 山本学 41人
4月20日	〈クロクロによる陶芸制作のテクニック〉 柏井良夫 6人
4月26日	〈焼成〉 山本学 47人
5月11日	〈初歩の陶芸制作のテクニック〉
5月18日	〈クロクロによる陶芸制作のテクニック〉 柏井良夫 12人
5月24日	〈焼成〉 山本学 57人
6月8日	〈初歩の陶芸制作〉 山本学 47人
6月15日	〈クロクロによる陶芸制作のテクニック〉 柏井良夫 9人
6月21日	〈焼成〉 山本学 45人
7月6日	〈初歩の陶芸制作〉 山本学 38人
7月20日	〈クロクロによる陶芸制作のテクニック〉 柏井良夫 10人
7月26日	〈焼成〉 長野敬 37人
9月27日~29日	〈越前の風土と窯元をたずねて〉 山本学 42人
10月12日	〈初歩の陶芸制作〉 吉増達夫 31人
10月19日	〈クロクロによる陶芸制作のテクニック〉 柏井良夫 4人
10月25日	〈焼成〉 吉増達夫 35人
1月18日	〈初級、上級合同陶芸制作〉 吉増達夫 柏井良夫 38人
1月31日	〈焼成〉 吉増達夫 32人
2月15日	〈初歩の陶芸制作〉 吉増達夫 41人
2月22日	〈クロクロによる陶芸制作のテクニック〉 柏井良夫 7人
3月6日	〈焼成〉 吉増達夫 48人
3月7日	〈初歩の陶芸制作〉 吉増達夫 28人
3月14日	〈クロクロによる陶芸制作のテクニック〉 柏井良夫 6人
3月27日	〈焼成〉 吉増達夫 34人



## 6 昭和50年度所蔵作品

### 「購入作品」

1	木下孝則	女優の像	油彩・キャンバス	92.2× 72.8	1926	第5回春陽会展
2	〃	赤衣の女		71.5× 51.0	1934	サロン・ドートンヌ
3	福沢一郎	鬼も忙がし地獄の整地		227.3× 181.8	1974	
4	〃	なげきの市 I		227.3× 181.8	1974	
5	〃	なげきの市 II		227.3× 181.8	1974	
6	宇佐美圭司	顔シリーズ (7点組)	シルクスクリーン%	74.5× 55.3	1973~1974	
7	保田春彦	階段のある広場(SIRACUSA)	彫刻・ステンレススチール	75×75× 6.0	1973	
8	〃	階段のある広場(TAORMINA)	〃	75×75× 6.0	1973	

### 「寄贈作品」

1	石井柏亭	室内	石版・紙	27.5× 42.0		
2	北川民次	タスコの裸婦	木版・紙	27.0× 44.0		
3	〃	メキシコの浴み	〃	27.0× 31.0		
4	宇治山哲平	段々畠と無花果	〃	23.0× 31.5		
5	田中恭吉	あをぞら	〃	16.5× 12.0		
6	〃	風景	〃	11.0× 16.0		
7	新田 稔	忘帰洞	〃	11.5× 14.0		
8	〃	勝浦港外	〃	10.0× 13.0		
9	小野忠重	川	〃	34.5× 30.0	7%	
10	〃	なみ	〃	30.0× 41.0	3%	
11	〃	とり	〃	36.5× 49.5	100%	
12	〃	岩壁	〃	30.5× 44.5	1%	
13	〃	富士	〃	30.0× 45.0	7%	
14	〃	レニングラード早春	〃	30.5× 44.5	3%	
15	〃	黒い海の岸	〃	29.5× 44.5	1%	
16	〃	空港の片隅ニ ユーデリー	〃	25.0× 45.0	5%	
17	〃	パリの屋根	〃	30.0× 45.0	1%	
18	木下孝則	A氏像	油彩・キャンバス	52.7× 45.6	1949	
19	〃	A夫人像	〃	65.0× 50.0	1949	
20	〃	後向きの裸婦習作	〃	110.2× 80.0	1925	

## 7 所蔵品貸出状況

貸出先	展覧会名・会期	貸出作品	種別	点数			
兵庫県立近代美術館	開館5周年記念 近代100年名作展 50.10.10~11.9	川口軌外作 「少女と貝殻」	洋画	2			
		石垣栄太郎作 「街」					
岡山総合文化センター	第14回名作展「日本の幻想派」詩 情とロマンの展開(シュールレアリズム) 5122.18~3.7	川口軌外作 「少女と貝殻」	洋画	5			
		「地 維」					
		「ボヘミアン」					
		石垣栄太郎作 「街」					
					「女の哀しみ」		

## 8 県立近代美術館

### 協議会委員

氏名	住 所
明楽光三郎	海南市日方582
川瀬 浩一	御坊市御坊79
大岡 皓崖	和歌山市黒田168の9
桐山 義雄	和歌山市北新金屋町7
楠見 勝寛	和歌山市新在家56
斎田 武夫	和歌山市湊671
島村 安彦	和歌山市磯山町4の2
杉本 義夫	新宮市船町2の6の6
高橋 正司	伊都郡かつらぎ町妙寺902
玉井 一郎	和歌山市寺町13
寺田 健治	和歌山市北堀北ノ丁3の40
富松 助六	和歌山市北坂ノ上ノ丁1
尾藤 昌平	和歌山市新堀七軒町5
室谷 文男	和歌山市園部有功ヶ丘団地152の8
脇村正太郎	田辺市栄町52

会 長 明楽光三郎  
副会長 室谷 文男

## 9 県立近代美術館

### 職員構成

館 長 堀 亨  
次 長 高 巖  
(事業課)  
課 長 野口照彦  
主 査 辻本介彦  
学芸員 酒井哲朗  
学芸員 太田将勝  
嘱 託 和高伸二(非常勤)  
(庶務課)  
課 長 吉田 禎之  
技 師 松下勝行  
主 事 西原志郎

和歌山県立近代美術館年報  
昭和50年度

昭和52年3月31日 印刷

昭和52年3月31日 発行

編集・発行

和歌山市小松原通1丁目

和歌山県立近代美術館